

Tangolandia

秋
2016

日本タンゴ・アカデミー会報

(HP : <http://tangoacademy.jp/>)



—目次—

わたしのひそかに愛するタンゴ Mi dolor	高場将美	2
私の愛聴盤 (第9回)	中村 明	7
タンゴこぼれ話 (第6回) “男性優位”では・・・	弓田綾子	11
カンパラーチェ逍遙 (第5回)	島崎長次郎	13
コンチネンタル・タンゴを聴き直す (第1回)	齋藤富士郎	17
タンゴ名曲事典の探索	岩垂 司	21
米山宏氏を偲んで	島崎長次郎	25
ネットで楽しむ様々なタンゴ	松野初美	27
タンゴ～出会い、きっかけ～	後藤 武	30
タンゴに出会って元気です	専光しのぶ	32
2016東北リンコン・タンゴセミナーのおしらせ	佐藤勝夫	35
第19回 東京バンドネオン倶楽部演奏会を聴いて	大澤 寛	37
池田みさ子とオルケスタ・オルテンシア 内幸町ホールに初登場	笠井正史	39
SOUL OF TANGO FROM BsAs	笠井正史	40
タンゴの豊かさと永遠性 『ラ・クンパルシータ全集』を聴いて	大類善啓	42
会員の広場		43
新・訳詞コーナー「Afiches」	大澤 寛	47

わたしのひそかに愛するタンゴ

わたしの痛み（わが悩み）

Mi dolor

高場 将美

先日、日本タンゴ・アカデミーの Clase de Tango（タンゴ・セミナー）で（わたしも一部を担当したが）、コメンテーターの山本幸洋さんが、この曲をかけた。話の流れからはどの曲でもよかったのだが、この会に集まる人は大部分が、山本さんより年長のタンゴ・ファンなので、「みなさんお好きだろうと思って」この曲を選んだとのこと。この日のテーマは近年のアーティストのことだったので、曲目には古典的なものも入れて、古いファンにも親しんでもらおうというわけだったので。年長組に入るわたしも好きな曲で、このメロディを聴いて、懐かしく、感傷的な気分になった。青春の調べ？……

この曲の、いちばん通用している日本語は『わが悩み』だが、山本さんは、それでは古風すぎると考えたようで『俺の悩み』と、若者の気持ちを打ち出していた。

わたしは「わたしの痛み」としたい。日本語の「悩み」にあたるスペイン語は数種類あって、それをぜんぶ「悩み」と置き換えるのはどうも……。もちろん、それぞれのスペイン語のニュアンスを異なる日本語に訳し分けることは不可能だが。

この曲の場合、悩みにあたるスペイン語は dolor。このことばの本来の意味は「(肉体的な) 痛み」である。その意味をとって、分かりやすく「悩み」と訳していいじゃないか。——いや、納得がいかない。

ほんとうに悩み悲しむと、胸のあたりとか、からだ全体が痛くなるではありませんか？（わたしには長い？人生でごくわずかしか経験がないが）。ほんとうに痛いんです。それほどの感情をあらわす dolor ということばを、一般的に「悩み」としてしまっただけではいけないと思う。

dolor は、つねに「痛み」と訳して、意味は通じるし、ニュアンスもはっきりわかる。「苦痛」でもいいだろうけれど、もっとふつうに日常会話でも使うことばなので、すっきりと「痛み」がいいと思う。

さて、『わたしの痛み』を最初にわたしが聴いたのは、喫茶店に通ってタンゴを聴きはじめたころ、今から60数年前だ。

最初のメロディが実に印象的で（あとにも印象的な展開があるが）、初めて聴いて魅了された。たぶん日本で発売されたアルフレード・デ・アンジェリス Alfredo De Angelis 楽団のレコードだったので。この録音は、今日でもダンス・ファンなどにたいへん人気があるようだ。

デ・アンジェリス楽団のレコードには歌が入ってない。専属歌手のフロレアール・ルイス Floreal Ruiz も、オスカル・ラローカ Oscar Larroca も、ステージではこの曲を歌っ

ていたという。でも歌手入りの録音はされなかった。この歌手たちの歌はすばらしかった、と、実際に聞いたブエノスアイレスの古老（失礼！）たちは言っている。そう言われてもねえ！

（わたしは、かなりラローカのファンだった。彼が別の楽団でこの曲を録音していることは、最近になって知った）。

わたしは、この曲には歌詞があることも知っていて、というよりは、デ・アンジェリスの録音は歌入りだと、ごく最近まで思い込んでいた。この記事を書くために調べたところ、この録音は、この楽団の絶頂期をちょっと過ぎた1957年のもので、歌はなかったと知って、愕然としてしまった！わたしの中には、いつも歌と演奏がいっしょに流れていたのに！

わたしの聴いた『わたしの痛み』の歌は、たぶんアンヘル・バルガス Ángel Vargas だったのだろう（1955年録音。伴奏の編曲指揮・第1バンドネオンは、エデルミーロ・ダマリオ Edelmiro D'Amario）。それとデ・アンジェリスの演奏が一体化して、わたしの記憶にあったようだ。年をとると（わたしは自分ではそう思っていない）「新しいことは忘れても昔のことは良く覚えている」といわれるが、記憶がゴチャマゼになっていたんですね。哀！

この曲の第1部は、ふつうよりも抑揚が多い、長めのフレーズで始まる。歌詞は凝っているけれど、わたしは3度ほど聴いたころに最初の1行ぐらいは覚えていたと思う（当時のわたしでも知っている単語ばかりだった）。喫茶店で偶然に遭遇した曲で、題名も知らないからリクエストもできず、流れてきたら「しめた！」と喜んだわけだ。毎日通っていましたがね。



Vuelvo de tierras muy lejanas donde ayer / fuera a buscar olvido a mi dolor,
/ consuelo al alma que sufrió, al creer / en los engaños y promesas del amor.
Rumbo al olvido, que es un bálsamo al sufrir, / partí llevando en mi amargura / el
cruel recuerdo de la ventura / que en otros tiempos junto a ti creí vivir.

（わたしはとても遠い土地から帰ってきた。そこへは、きのう、わたしの痛みを忘れられるように、くるしんでいた魂になぐさめを見つけるために行ったのだった。——愛の偽りと約束を信じて。忘れることは悩みを慰めるバルサム（香油）、そこに向かってわたしは、苦味のなかに幸運の冷酷な思い出をもって出かけた。——かつては、あなたのそばでその幸運を生きっていると信じていたのに）。

日本語にすると変に長ったらしいが、言い訳をすると、元の歌詞の文の構成がやや曲が



りくねっているので訳しにくい。さっき「歌詞が凝っている」と書いたが、じつはメロディ・フレーズの抑揚、長さ（音の数）がふつうと違うので（だから美しく個性的なのだが）、作詞家がことばを当てはめるのに苦労した結果である。

曲のほうに凝っていたわけだ。この凝った、それゆえタンゴらしくない感覚も入ったメロディの作曲者は、タンゴ史上屈指のバンドネオン奏者カルロス・マルクーチ Carlos Marcucci (1903-57) である。

この姓を、わたしは（それ以前からみなさんも）「マルクッチ」と表記してきた。アルゼンチン＝ウルグアイでは、イタリア語の人名は、できるかぎりイタリア語読みにすることが、同地域の恒例になっていたからだ。でも近年は、イタリア語の2重子音は、ひとつの子音として発音することが一般化している（規則として押し付けるものではないが）。そして、2重子音の前の母音（だいたいの場合アクセントがある）はほんの少し音を伸ばしている。だから、カタカナは「マルクーチ」と書くのがいいようだ。

（もちろん、完全にスペイン語発音で「マルクーシ」も間違いではない。しかし、タンゴ専門のFM放送でまで、偉大な往年のイタリア系タンゴ人の名前を、スペイン語で発音されると、わたしは頭にくる。そんならピアソーラを「ピアソージャ」と呼んで、聴取者がどう反応するかやってみろ！）

アルフレード・マルクーチ（上写真）は、8歳ぐらいで、初期のバンドネオン演奏家でもっとも音楽家（楽譜が読めた唯一の人）であるアルトゥーロ・ベルンステイン Arturo Bernstein（ピアホールで活動し、タンゴよりもウィнна・ワルツなどヨーロッパ舞曲で有名だった）に学んで、細かい音の並んだむずかしい練習曲をたくさん暗記させられた人である。10歳そこそこで子どもグループで、いっばしのプロ活動。

1920年代の末にごく短期間だが自分の六重奏団をひきいて録音したが（『わたしの痛み』も含む）、グループのメンバーとして演奏するほうが多かった。有名なところでは、1925年のフランシスコ・カナロ Francisco Canaro 楽団のパリ公演への参加、30年代の初めから50年代にかけてのフーリオ・デカーロ Julio De Caro 楽団での第1バンドネオン担当がある。

作曲家としては『わたしの痛み』以外は、あまり後世に残らなかった。ただしバンドネオン独奏用の組曲『スペインの調べ Aires españoles』は、以前は、バンドネオンを学ぶ人のほとんどすべてが練習した曲である（結局弾けなかった人も多かったろう）。また、マルクーチのバンドネオン教則書は長いあいだ、もっとも使われてきたものだ（ある時期には、ほぼ唯一のバンドネオン教則本だった）。

数学的とまでいえる正確さでバンドネオン変奏を弾くことで有名だったマルクーチは、タンゴの音楽家の中ではクラシック音楽に近づいた感性・技術の持ち主だったといえるだろう。『わたしの痛み』のロマンティシズムはクラシカル？ そんな分類は意味ないが、とにかく美しいですね。

これに作詞したマヌエール・メアニーヨス Manuel Meaños (1902-59) は、少年時代から雑誌に詩を投稿、そしてアマチュア劇団での活動を経て、コメディの、やがてレビューの脚本家としてプロになった。マイポ劇場など、華やかなヴァラエティ劇場で作家・監督として活動し、やがてラジオの放送作家・演出家として、もっとも名声を上げた。さまざまな番組を手がけ、自身の語りの番組も人気だったという。いくつかタンゴの作詞もしたが、いまでも歌われるのは『わたしの痛み』だけだ。

わたしが不思議に思うのは、『わたしの痛み』1曲だけで（といっっては失礼だが）タンゴ史に忘れられることのない名声を獲得したこのふたりのクリエイターたちの人生——どちらも長くはなかった——が、ほとんど同じ時期に重なっていることである。そんなことは偶然に違いない。でも……。

さあ曲の第2部の歌い上げるメロディ。フレーズの長さはずいぶん不規則だ。歌詞は、それにピッタリ合わせ、しかも、すっきりと分かりやすい。曲がりくねった第1部とは大違いだ。これがプロの作詞家の腕というもの。



Fui / esclavo de tu corazón, / a tus caprichos yo cedí / y me pagaste con traición.
Hoy, / curada mi alma de su herida, / pienso que nunca he de volver / a mendigar tu querer.

(わたしは、あなたの心の奴隷だった、あなたの気まぐれに屈服した。そしてあなたは裏切りをわたしに返した。

きょう、わたしの魂の傷口はいやされ、わたしは二度と繰り返そうと思わない、あなたの気持ちを恵んでくださいと願うことを)。

そして第3部がある。歌のタンゴの時代になってから（おおざっぱに言って1920年代から）タンゴは2部構成になったが、この曲は3部構成。マルクーチは形式を重んじたのかしらん？ 古典タンゴの第3部は、リズム要素の強いものにするのが通例だったので、彼もそんなスタイルで演奏できるように楽譜になっている。でも本人の実際の演奏は、フレージングをしてうたうように（あるいは、つぶやくように）弾いている。



Porque allá donde fui / mis pesares a olvidar, / del amor conocí / la delicia hasta embriagar.

Y el placer que sentí / mi dolor llegó a curar. / Mi pasión solo dio / los sentidos para

amar, pero mi alma dejó / su pureza conservar / y así pronto llegó / sus tristezas a olvidar.

(なぜなら、わたしが悩みを忘れにいったそのところで、わたしは酔いしれるまで愛の至福を知った。そして、わたしが感じた喜びは、わたしの痛みをいやしてしまった。わたしの情熱から生まれたのは愛することの意義だけ。でもわたしの魂は、その純粋さを保ちつづけるのをやめた。そしてすぐに、その悲しみを忘れてしまった)。

なんだ、この展開は！ 幸せになったとは言っていないが、痛みは忘れた？ ……。

この第3部は自暴自棄なのか？ 時あたかも世界大不況のまっただなかで、厭世的なタンゴがヒットしたりしていた。

考えさせられる第3部だが、ここはサッと聞き流しておいて、全体に「わたしの痛み」を感じるのが、この曲の正しい(?) 聴きかただと思います。

* YouTube で聴きたい方には、特に下記をお勧めします。

マルクーチ楽団 (1930) — <https://youtu.be/3KApUHNLIwA>

ゴメス歌 (1930) — <https://youtu.be/GnGO39rU>

バルガス歌 (1955) — <https://youtu.be/ZLrcHnX9Ks4>

機関誌2誌の合体案について

8月27日の役員会でTangueando en Japón と Tangolandia を合体させることが決議されました。背景は、かねてから“Tangolandiaを背表紙のある形に出来ないか”という声が多くあること、及び編集面からは 1) 連載記事の期間が空き過ぎること 2) 掲載誌指定で早目に頂いた原稿を、発行のタイミングの関係で、長期間眠らせる結果になること等です。

現在、編集部を中心に誌名・発行回数(年4回を目指す)・頁数(年間予算計上)を検討中です。



私の愛聴盤

～第9回～

中村 明 (川崎市)

8月7日、待望の「ラ・クンパルシータ全集」が到着。早速、楽しく拝聴。その感想を謝辞と共に、島崎長次郎名誉会長宛に投函致しました。早速、お電話で、更にお手紙で、ご丁寧なご連絡を頂きました。それに合わせて、会報の「Tangolandia」の「私の愛聴盤」へ『熱い思い』を語るようにとのお話。続いて、大澤編集長からも、ご要請がありました。

アカデミーの諸先輩のアルゼンチンタンゴへの熱心な思い、広範な知識と研究活動には、日頃から敬服しています。それに引き換え、私は、ただ聴いて楽しんでいるだけです。極めて低レベルの内容になり、恐縮ですが、その一端をご披露させていただきます。



愛聴盤ではなく「愛聴テープ」です

日々、楽しく聴いている「アルゼンチンタンゴ」の殆どは、FM放送のエアチェックで、カセットテープに録音したものです。生来、面倒なことは不得手。「ながら族」を決め込んでおりますので、この楽しみ方は我ながら最高と自負しています。

- ・高橋忠雄さんの軽妙な語り口。(同氏とは、六本木にあったカンデラリアで、お話をしたこともあり、親近感を覚えます)
- ・高山正彦さん辛口の解説。
- ・ホルヘ・的場さんの独特の口調。

これら諸先達選ばれた珠玉のアルゼンチンタンゴ。個性溢れる解説と楽しいお話を聞きながらの愛聴。至福の時間。素晴らしい、の一言です。

昭和40年代。勤務していた会社は「丸の内の不夜城」と言われ、繁忙を極め、音楽鑑賞とは無縁の環境でした。その中でエアチェック。共同通信の「FMfan」(1966～2001)、音楽之友社の「週刊FM」(1971～1991)を毎週必読。アルゼンチンタンゴの放送を中心



エアチェックで収録のカセットテープ
(アルゼンチンタンゴ関係)

に記録。これに基づいての録音を家人に頼み、その録音テープを随時聴いて楽しみました。当時、片面1時間録音のカセットテープは不適との評がありましたが、全て、この長尺を使用。特に問題は発生せず、現在も日々愛聴しています。

アルゼンチンタンゴを意識的に聴くようになった切っ掛けは、映画「グレン・ミラー物語」でした。同い年で懇意にしていた従兄弟・TY君と度々交流。

野球観戦、映画鑑賞等を楽しんでいた学生時代です。彼と、この映画を見た後、時々行っている新宿の「コタニ・レコード店」へ立ち寄り、グレン・ミラーの数々の曲を視聴室で聴いていると、馴染みになっていた店の方が、一枚のレコード（勿論SP盤）を持って来られ、試聴を勧められました。

それは、Crismarの“Rodríguez Peña”でした。曲の半ばに「クシコス・ポスト」のメロディーが流れ、妙に印象的。早速、従兄弟が購入。彼と二人。その日から（昭和29年春）、揃って、タンゴファンになりました。

以降、ラジオで聴き、公開録音のホールに通い、新宿・神保町・八重洲口・信濃町にあったタンゴの喫茶店巡り。楽しい時を過ごしました。

（当時、一般のレコード店では、入手出来なかった“Héctor Varela”の“Canaro en París”を神保町のミロンガで聴いた感動。思い出の一つです）

今回の「ラ・クンパルシータ全集」《Disc 2》に「原孝太郎と東京六重奏団」のお話がありました。この楽団が出演していた実演喫茶の「ラ・セーヌ」。良く通った懐かしい場所の一つです。



小沢泰とオルケスタ・ティピカ・コリエンテスのCD

当時の楽団演奏は、我々聴衆との距離感が身近で、リクエストを含め、様々な交歓が可能で、大変楽しいものでした。特に「小沢泰とオルケスタ・ティピカ・コリエンテス」は好みでした。リーダーの小沢さんの当意即妙な話術と司会に拍手をしていました。演奏も勿論です。A.M.P.から出た、このオルケスタの「タンゴへの道」CD-1170S。往時の様々な情景を思い出しながら愛聴しています。

『スペイン語との交流を通じて』

同窓同期のRT君が、時々語るスペイン語の世界。一度、勉強して見たい、と思っていました。昭和42年4月。NHK/ラジオ・第二放送で「スペイン語講座」がスタート。早速、テキストを購入。学習開始。ここで嬉しかったのが、講座の中で紹介された“Adiós, pampa mía”。テキストに歌詞の記述もあり、放送に合わせて、口遊みました。タンゴの歌を真剣に？聴き始めた最初です。問題は、放送時間が火曜日の午後6時からの30分間。当初、エアチェックをしていましたが、仕事超繁忙の時期。数回分のテキストを無駄にしました。

※この曲の演奏者と歌手名。数回、NHKに問合せましたが、未回答でした。

スペイン語に真剣に取り組んだのは、昭和51年の秋からです。日本から一度も出たことの無い人間に、スペイン駐在の社命。上司の、現地に行けば、通訳が100%アテンドするから問題ない、と言う話を安易に受けて赴任。確かに仕事時間中は問題ないのですが、私生活は困惑の一語。戸惑うばかりでした。

日本出発時に、外務省OBのU顧問から、現地に行ったら、必ずレッスンを取る様にとのアドバイス。色々、学校を探したのですが、終業時間後と言う制約から中々見つからず。最大の顧客、且つ、プロジェクトの重要なパートナーでもあったスペインTelefónicaのMontero局長訪問時に仕事の話の後、この状況を話しました。

好運にも、局長の秘書の方が、その任を肯って下さることに。スペイン在任中（昭和51年～54年）の3年間。入門から日常会話、作文、スペインの生活事情に至るまで、ウィークデーの終業時間後の毎日、広範に亘っての個人レッスンを受けることが出来ました。

恩師のMaría Isabel先生は、その後、会社の同僚・KS君と家庭を持たれたこともあり、今でも、親交を重ねています。

当然ですが、スペイン赴任時、大量のカセットテープを持参しました。大岩祥浩先生が担当されていたNHK/FMの「ステレオコンサート・ラテンタイム」の録音が大半。先生の極めて判り易いお話、リクエストへの対応、タンゴ名曲事典等々、異国に居ることを忘れ、何度も、何回も愛聴しました。

※後年、ポルテナ音楽同好会の月例会で、この話を先生にお話しをし、喜んで頂きました。

ここで、横浜プーロ・タンゴ同好会の主宰者・小林謙一さんとの交流が始まりました。以降、この会に参加。毎月、楽しませて頂いています。

帰国後の数年、復習を兼ねての学習を続けましたが、断続的。本格的に取り組んだのは、会社員生活・終了後の平成9年からです。昭和55年、古河三水会のスペイン語講座で指導を受けたCarlos Molina先生が開設されたスペイン語の学校“Academia Castilla”に復学。通常の勉強の他に、スペイン語学習を兼ねた、スペイン各地、アルゼンチンを含めた中南

米各国への研修旅行にも参加。学習を継続しています。この学校で、アルゼンチンタンゴの先輩・お二人との交流が生まれました。

お一人は、石川浩司さんです。Nifty Serveのフォーラムでアナリストタンゴのハンドルネーム名で活動されていた石川さん。まさかの学校での出会いでした。同氏主宰の月例会で、色々のオルケスタのテーマ音楽（出囃子？の曲）を所望したところ、即応して頂く等々。思い出は尽きません。日本タンゴ・アカデミーへの入会も、石川さんのお話によるものです。



Academia Castillaのパンフレット



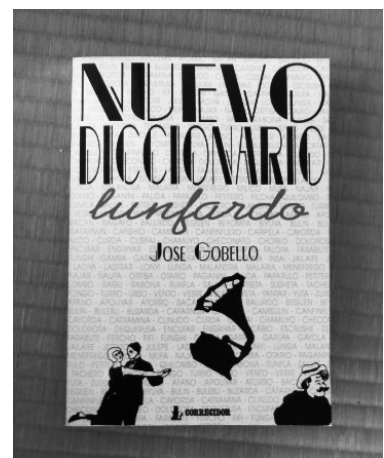
石川さんのご推奨で入手した
「タンゴ歌曲関係の書籍」

もうお一人は、ダンスの世界でご活動の立岩眞理子さんです。同じクラスでの学習。苦手な“subjuntivo”へ明解なアドバイスを受れたり、ダンスのお話を聞いたり。種々の面で、刺激を受けました。García Lorcaへの関心が芽生えたのも立岩さんのお話に啓蒙された結果です。

「ダンスの勉強にブエノスアイレスに行ってくる」とのお話を伺った時は、文字通り“ビックリ仰天”すると共に、その決断に大拍手でした。

以上、主題の「愛聴盤」には程遠い記述になってしまいました。タンゴ愛聴者にも、この様な人間も居る、と言うご参考になれば幸いです。

（この文章も、大岩先生のお話を聞きながら記述致しました）



立岩さんのブエノスアイレス土産
「Nuevo Diccionario Lunfardo」
(タンゴ愛聴時、大変役立っています)

“男性優位”では……

UNIVERSO MACHISTA

アドリアナ・バレラ (Adriana Varela)

(1998年GENTE誌)

訳:弓田 綾子

私がタンゴの世界に入ったきっかけは、“ポラーコ”（ポーランド人）の愛称で親しまれ、気さくでやさしく男性的な魅力ある歌手のロベルト・ゴジェネーチェに大きな関心を持ったからです。

私はタンゴ界に入る前は、ロックの歌手を目指していましたが、ゴジェネーチェの男っぽい歌唱になぜか心惹かれ、ロックではなくタンゴを選んだのです。そんな私にとってゴジェネーチェは、大きな目標であり、常にタンゴの師でもありライバルでもありました。

芸術の世界は様々なジャンルがあり、それぞれに厳しさや魅力があります。ロックではなく、私はタンゴを歌うようになり、いろいろな場面に遭遇し、気がついた事が多々あります。

それは、音楽の世界はとても情熱的だと感じるものの、タンゴの世界は“男性優位”では、とすることがあるのです。何故ならタンゴの詩を深く読めば読むほど、それはいつも愛する女に裏切られた哀れな男の姿ばかりを、歌い上げた曲が多いのです。その反面、女性の場合はどうでしょう……。身も心も愛する男に尽くしながら、その男に翻弄されるも、そんなもの悲しい女の姿を詩にしたものは、男性が歌う曲よりもはるかに少ないのです。

男性の考え方や存在感ばかりを表面に出している曲が多いと思います。これらのことを思うとき、タンゴの世界はまさに“男性優位”なのでは、と、密かに思ってしまうのです。



確かにタンゴには、その歴史からも分かるように、スペインやイタリアから移民して来た男たちの、捨て去った故里への郷愁の思いを、酒と女に紛らわせようとした一種のフラストレーションが、その根底にある音楽だからこそ、詩の中に男の心中を託したものが多くのかも知れない、と、思うのですが……。

これに対し、女性の場合は自分の思いをストレートに出した曲が少なく、仮にあったとしても、歌うことが稀な私たちには、社会的通念からもまず母親として、また主婦として、そのジレンマを感じながらも、大いに尽くすことが義務づけられている、



アドリアナ・バレラ 1952年ブエノス・アイレスで生まれる。タンゴをあらゆる角度から表現し個性的な歌手である。

ということも忘れないでほしいのです。

しかし、今までは尽くすのみの女性が多かったけれど、新しい時代を担う女性は、固い意志を持って尽くす反面、自己アピールを強く求めることも事実です。したがって、これからはタンゴ音楽の詩には、女性の存在をもっと表面に出した内容や、男性同様女性の内面を訴求した曲が求められるのです。それには女性の名作詞家の出現が待たれます。

そのとき初めて私が思ってきた「タンゴの世界は“男性優位”」は覆されるでしょう……。

大型ビジョンの将来とタンゴの復権を語った星野睦郎さん

去る9月4日早朝、NHK第一放送「マイあさラジオ 日曜訪問」に当会会員の星野睦郎さんが出演された。もちろんタンゴ人としてではなく、日本パブリックビューイング協会代表理事としてである。タンゴ人としての星野さんの最近では、今年第4回を迎えるタンゴ早慶戦の企画に参画され、かつ女性だけの楽団として異彩を放つ池田みさ子とオルケスタ・オルテンシアの後援に注力されるなど幅広くかつ具体的な活動を続けて居られる。

以下極く大まかに放送内容を再現してみたい。

リオ・デ・ジャネイロ五輪の閉会式でも映し出された渋谷のスクランブル交差点。ここは訪日客の40%が訪れるという。その交差点を取り巻くように見下ろす5台の大型ビジョンが設置されている。近寄って下方から見上げて、或いは斜めから見てもよく見える。第1号が設置されたのは1987年、99年には3台、そして現在の5台となり周辺を加えればこの地域に15台が、全国では150台以上が稼働中だという。

これらの大型ビジョンの草分け・パイオニアが、星野さんが創立され現在会長を務めておられる Pas Communications である。スタート時期のご苦労は大型ビジョンが出す音量に関する地域住民からの抗議だった由。この調整のために業界団体を作り、社会貢献即ち地域情報・行政情報を流すことを第一義とする社会的責任を負う媒体であることを目指して来た。とりわけ災害時情報を流し続けることの重要性を東北大災害時に痛感したという。当初の広告対象は音楽だった。CDが売れた時代だった。さらに20世紀から21世紀へのカウントダウンで大型ビジョンが注目を浴びた。

将来に向かっての取り組みとしては、やはり災害情報に対応する端末・媒体であると自らを位置付けていること。そして2020年東京五輪への対応として、外国人へのメッセージの多言語化システムの構築を急いでいることである。

ここから話はタンゴに移る。大好きなタンゴが下り坂にあることが残念であり、立て直しを図りたい。

タンゴという素晴らしい音楽を聴いたことがない若者が多い。タンゴに限らず、シャンソンも、ハワイアンも、ウエスタンも全てが退潮気味である。これらの復活にお役に立ちたい。具体的には渋谷、原宿、有楽町の大型ビジョンでタンゴの映像・音楽を流したい。

対談相手のアナウンサーからは“タンゴ復活の仕掛け人ですね”という言葉が出た。

それにしても、全国放送で短時間とはいえタンゴが語られたのは何年、何十年振りだろうか。星野さんの夢が実現する日が近いことをタンゴ好き仲間として待望するものです。

(大澤)

カンバラーチェ逍遥 (5)

忘れられない…

“とっておき”の熱い思い出

島崎 長次郎

明治の末期から長く続いたSPレコードの時代は、昭和20年代の半ばころから登場したLPやEPにとって代われ、様相は急速に変わってきた。さらに追い討ちをかけるように登場してきたのがテープレコーダーで、音に関する世界は一変してしまった。その結果、昭和30年代に入ると放出されたSPレコードが一気に出まわり、中古レコード店にはわかに活気づき、古道具屋や骨董店の店先にSPレコードが無造作に積まれることも珍しくなかった。

古道具屋歩きをしていた当時、その実態を見ると、中身は実に雑多で、戦前の端唄、小唄、義太夫、民謡に始まって、流行歌に浪花節が圧倒的で、後は童謡に落語、軍歌、そしてやっと横文字としてみると、使い古した盤面のダンス・ミュージックといったたぐいのものと12時のクラシックのアルバムなどがほとんどで、お目当てのタンゴにはめったにお目にかかれない、というのが実態だった。したがって外盤を掘り当てるなどということは夢にも思うことはなかった。

ところが、その夢のようなことが実際にあった。私にとっては後にも先にもたった一度だったけれど…。今でもそのときのことを鮮明に覚えていて、決して忘れることはない。

以前にも述べたように、昭和30年代前半は社会人になり、渋谷区の京王線の初台駅からほど近い不動通りのアパートに住んでいた。交通の便は至極よく、新宿にはたったの一駅、渋谷にも京王バスで12～3分ほどで、たしか料金はその頃10円だったと記憶している。

ある春の日曜日の午後のこと、例によってレコード・ケースをぶら下げてフラッと渋谷行きのバスに乗った。いつものことだが特に当てもなく、窓外に流れる町の風景をぼんやり眺めながら…。すると間もなく渋谷駅に着く手前、今はNHKの放送センターのある地域の南にあたる「富ヶ谷」のバス停前に、小さな古道具屋があるのに気がついた。ハッと行って急いで降りて店に近づくと、店頭が一番左端に皮の背表紙のついた12枚入りの厚くて綺麗なレコード・アルバム、それも数冊ほどがデンと積まれていたのだった。予感というのだろうか、これは大変なことになりそうだとアルバムをめくる前から緊張が走り、ドキドキと胸の高まるのを感じた。いつものマナーで店主に「すみません、これ見せてもらっていいですか？」とはやる心を抑えながら声をかけ、丁寧にアルバムを手にしてめくると、いきなりビクター (Camden) 盤でカラベリの「ボルベ」や「インスピレーション」。フレセドの「ティグレ・ビエホ」と「エン・ラ・ウエージャ・デル・

ドロール」。ロムートの「エル・アグアセロ」と「マル・デ・フォンド」などが次々に出てくるのにはびっくりし、さらにめくっていくとオデオン(仏)盤でカナロの「トモ・イ・オブリゴ」や「ラ・シエギータ・デ・フロリダ」、それに「ビエホ・シエゴ」などが次々に目に飛び込んでくるのだった。しかもみんな見たこともない美しい外盤ばかりなだけに、“何だ、これは！”と一種言いようのない興奮状態に陥ってしまった。今でも忘れないのは、店頭の隅でしゃがんでこれらをめくっていたのだが、履いていた下駄が興奮による緊張でカタカタと鳴っていたのを今でもはっきり思い出す。そしてとっさに思ったことは、これほどのものが出たのだから、誰かに見つけられて横取りされるのではないか、という恐怖心に駆られ、思わずあたりを見回した。今思えばお笑いだが、そのときはものものだけに真剣だった。数えると総数なんと49枚。それまでもずいぶん古道具屋歩きをしたがこれほどまとまって見つかったのはじめてだし、第一すべてが綺麗な外盤というのはまさに奇跡というしかない。さて問題は値がいくらになるのだろうか、ということだった。そのときの所持金は800円ほど(今の金額に換算すると1万5千円くらいの計算?)だったからだ。恐る恐る親父さんに聞くと、“1枚50円だ”という。意外に安い。だが49枚だから合計で2,450円になる。足りない、さてどうする、と自問し、とにかくお願いし、レコードを一時預かりにしろ、金を用意して出直す以外にないと思った。まずは冷静にタバコを取り出して一服し、親父さんにも勧め、火をつけてやり雑談をはじめた。“こんな綺麗なレコードはめったに見ないが、どこから出たのですか”と訊いたところ、“この近くのお屋敷町に住んでいる元外交官のお宅から出たものだ”と教えてくれ、すべて納得がいった。立派な皮製の背表紙のアルバム、見たこともない美しい外盤など…。 “矢張り！”という感じで納得した。

そして、おもむろに“お願いがあるのですが”と切り出して、代金が足りないので手付け金800円を置くから、取りに行く間、絶対にほかの人に触らせないで少し待ってもらえないか、とお願いした。すると意外にあっさり了解してくれ、店の奥のほうに保管してくれた。そして、それを確認して飛ぶようにして自宅に引き返し、あたふたと金を用意してそれを懐に店に駆けつけ、お礼を言って残金を支払い、ホッと安堵の胸をなでおろした。

帰りはバスというわけには行かない。49枚を丁寧に5冊のアルバムに入れ、両手で抱えてみるとずしりと思い。そこで、めったに乘らないタクシーにすることにした。その頃は小型のタクシーにルノーというのが走っていて、初乗りはたしか65円くらいだった。それに乗って帰宅したが、とたんになんだかすっかり疲れ果ててしまって、抱えて持ち込んだレコードをすぐに聴く気力がなく、畳の上に大の字になって寝そべってしまった。先ほど来のかつてない興奮と緊張の余波と、ともかく無事に自宅に運びこめた安堵感だったのだろう。

しばらく後に起き上がったら、すでに春の日は暮れていた。やや落ち着いたところで電蓄の前に並べられた先ほどのレコードを、改めて1枚、1枚、ゆっくりと確かめながら取り出し、眺めては試聴した。都合4時間ほどをかけて全部を聴き終えたら、夜の11時をまわっていた。すべてが外盤で綺麗なだけに音は物凄くクリアーで、今まで収集した日本盤

とは段違いなことがわかり、また感激が高まり、すぐに眠る気にはなれなかった。

数えると60年も昔の話だが、その大部分は今でも大切に保存している。記憶をたどってそれらの中から代表的なものを、次にいくつか上げてみる。

□ VICTOR (Camden)

- ◆ ADOLFO CARABELLI Orquesta Típica
37225 FELICIA / RODORÍGUEZ PEÑA
37227 INSPIRACIÓN / ** (Pd)
37244 VOLVÉ / ** (Ra)
- ◆ FRANCISCO LOMUTO Orquesta Típica
37099 EL AGUACERO / ** (Ra)
37123 MAR DE FONDO / ÍNTIMAS
37325 RENCOR / MAR DE AUSENCIA
37418 INDIFERENCIA · IMAGINACIÓN (V)
- ◆ OSVALDO FRESEDO Orquesta Típica
37360 EL ESPIANTE / ** (Pd)
37581 EN LA HUELLA DEL DOLOR /
** (Ft)
37632 TIGRE VIEJO / ** (Ra)
- ◆ JULIO DE CARO Orquesta Típica
37626 EL ARRANQUE / ** (Pt)
- ◆ ALBERTO GÓMEZ (Canta)
37127 LA CUMPARSITA / DON JUAN



□ ODEON (France)

- ◆ FRANCISCO CANARO Orquesta Típica
165327 AMURADO / SANGRE AZUL
16383 ESTA NOCHE ME EMBORRACHO
/ VIEJO CIEGO
165585 LA CIEGUITA DE FLORIDA /
TAITA LADRÓN
165611 EL PAÑUELITO / MALEVAJE
165680 PARÍS / ADIÓS MUCHACHOS
250191 TOMO Y OBLIGO / TACONEANDO



.....他。

今となってはさまざまな音源で、これらはとくに珍しくはなくなったが、60年前のこの時代は、カラベリの「フェリシ

ア」とフレセドの「エル・エスピアンテ (機関車)」などを除いて、まったく未知の音源だったのだからその喜びは計り知れなかった。推察だが、これらの外盤SPには本場のアルゼンチンものは皆無で、アメリカのビクター盤、俗に言うカムデン (Camden) 盤と、フランス・オデオン盤だけだったので、放出元といわれる元外交官は、多分アメリカやフランスなどの、いわゆるエリート・コースを歩かれた方ではなかったか、と思量される。そして在任の時期は、レコードNo. から推して、多分1930 (昭5) 年代前半のあたりと推定され、これは1929年、いうところの世界的な経済恐慌の後とはいえ、まだまだタンゴ黄金期の余光のあった時期で、ヨーロッパを含め、名演の息づくよい時代だったといえよう。

いずれにしても、これは私にとって、生涯の忘れがたい、“とっておき”の熱い思い出になった。

(つづく)



コンチネンタル・タンゴを聴き直す(1)



いわゆるコンチネンタル・タンゴ



(El tango llamado “Continental Tango”)

齋藤 富士郎 (町田市)

NTA機関誌上でコンチネンタル・タンゴを話題にすることはこれまでは熱心なタンゴファンから「いかがなものか」とお叱りを受ける心配があった。故芝野史郎氏は本誌の2001年1月号No. 7から中断を挟んで2013年1月号No.30に至る迄の15回(最終回は遺稿)にわたってヨーロッパのタンゴ楽団についての評伝を執筆されたが、その前半の時期に当時のメンバーの某氏から「機関誌の誌面を無駄にするものである」といった意見が寄せられ、これに激怒した芝野氏は執筆を中断されてしまった^(*)。しかし、今日では日亜の複数のタンゴ楽団がコンチネンタル・タンゴを演奏することも珍しくなくなった。我国では小松亮太楽団やアストロリコ楽団がコンチネンタル・タンゴを演奏曲目の中に取り入れている。また小松真知子&タンゴ・クリスタルはコンチネンタル・タンゴだけの演奏プログラムを組むこともあり、チケットの売れ行きはその方が良いと聞いたことがある。こうしたことを考えれば、コンチネンタル・タンゴを当会機関誌上で話題にしてももうお叱りを受けることもないだろう。

良く知られているように「コンチネンタル・タンゴ」という呼び名は戦前のあるレコード会社が作り出したもので(大岩祥浩、島崎長次郎、中島栄司『タンゴ入門』音楽之友社、昭和48年)、勿論、外国では通用しない。しかし便利な言葉なので、余り堅いことは言わないことにして本稿ではコンチネンタル・タンゴという言葉を使うことにする。前記の『タンゴ入門』ではコンチネンタル・タンゴはアルゼンチン・タンゴと比べて

- ① 演奏に迫力が無い、
- ② 単純で面白さに欠ける、
- ③ 作品が少なく、演奏も個性に乏しい、

と言っている。言われてみればその通りであるが、それは一流のアルゼンチン・タンゴ楽団や作品と比較しての話で、比較対象の範囲を広げれば、そこまで否定的になることもないのではないと思われる。但し、コンチネンタル・タンゴは往時のヨーロッパ社交界における貴顕淑女向けのダンス音楽であって、「聴いて鑑賞する」という要素には乏しいことは否定できない。この意味でコンチネンタル・タンゴは今日では音楽としては過去のものであり、そこが弱みでもある。

(*) 2007年頃、機関誌の編集を担当していた筆者は芝野氏が再執筆することの説得を島崎名誉会長にお願いしてようやく実現に漕ぎつけた思い出がある。

コンチネンタル・タンゴ研究の上での大きな問題は資料・ディスコグラフィに乏しいことである。探せばあるのだろうが、どこに何があるかがわからない。我国でも故大森茂氏のようなヨーロッパ・ダンス楽団の大研究家がおられたが、氏の逝去と共にその膨大なコレクションや資料の行方はわからなくなってしまった。存命中の方々の中にも相当な研究家がおられると聞いてはいるが、未だお会いしたことも、親しくお話を伺ったこともない。ディスコグラフィについてはドイツにおいてヨーロッパのダンス楽団に関する浩瀚なディスコグラフィが発行されているらしく、Amazon.deを通して入手可能のようである。しかしこれはタンゴ以外のダンス音楽も含み、かなり高価らしく、そこまでは道楽が過ぎるように思っただけ購入するには至っていない。

考えてみれば我国のタンゴファンの中で1940年頃より以前に生まれたの方々の中にはコンチネンタル・タンゴやヨーロッパ楽団の演奏によるアルゼンチン・タンゴを聴いてタンゴが好きになったという方々は少なくないはずである。

我々は「タンゴ楽団」という言い方を普通にすが、戦前のドイツを中心に活躍したバルナバス・フォン・ゲッツィ (Barnabas von Géczy) 楽団、ペーテル・クロイデル (Peter Kreuder) 楽団、アダルベルト・ルッター (Adalbert Lutter) 楽団などの楽団は「ダンス楽団 (Tanzorchester)」と名乗っており、フォックストロットのようタンゴ以外の曲目も多数録音している。従って、それらの楽団のCDにおけるタンゴの「打率」は実際にはかなり低い。更にそれらの楽団が演奏するタンゴには様々なタイプがある。ヘラルドス・ガウチョ楽団は結成当時はGeraldo's Gaucho Tango Orchestra又はGeraldo and his Gaucho Tango Orchestraの名前でタンゴを演奏していたが、その後、His sweet music and dance orchestraと改名して取り上げる音楽の範囲を拡大し、タンゴからは遠ざかった。Tango-Kapelleと名乗っている楽団もある。Kapelleとは「チャペル」の意味であるが「楽団」の意味もある。だからTango-Kapelleは文字通り「タンゴ楽団」である。戦後に登場したアルフレド・ハウゼ (Alfred Hause) 楽団も「タンゴ楽団」と名乗っている。

先に結論を言ってしまうとヨーロッパのダンス楽団が演奏・録音しているタンゴは大概かに言って次の4つのカテゴリーに分けられるのではないかと筆者は考えている：

- (A) ヨーロッパで作曲され、スペイン語以外のヨーロッパ言語 (独、仏、英、伊など) のタイトルを持つタンゴ (El tango llamado "Continental Tango")
- (B) アルゼンチン風の雰囲気を出すことを狙って、ヨーロッパで作られたスペイン語のタイトル (例外はある) を持つタンゴ (El tango simulado al estilo Rioplatense)
- (C) 渡欧した南米出身 (大部分はアルゼンチン) 音楽家が現地で作曲したタンゴ (El tango Euro-Rioplatense)
- (D) ヨーロッパのダンス楽団・タンゴ楽団が演奏したアルゼンチン・タンゴ

戦前の日本でコンチネンタル・タンゴとして扱われたタンゴはほぼ (A) に該当すると考えられる。それで「いわゆるコンチネンタル・タンゴ」という意味で「El tango llamado "Continental Tango"」と命名してみた。

(B) は要するにアルゼンチン・スタイル模擬タンゴである。それで "El tango

simulado al estilo Rioplatense”とした。アルゼンチン・タンゴ風に聴こえるものもあれば、タイトルはスペイン語でも中身的にはコンチネンタル・タンゴといった方が良いものもある。

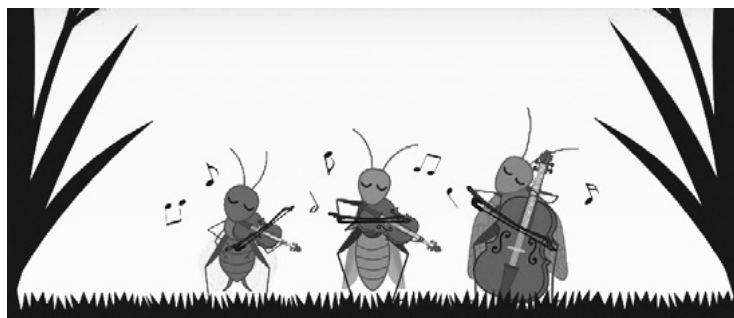
(C) はコンチネンタル・タンゴとは呼べないけれども、アルゼンチン・タンゴと言うわけにも行かない。言わばアルゼンチン・タンゴ・ヨーロッパ2世、“El tango Euro-Rioplatense”である。

(D) は勿論、コンチネンタル・タンゴではない。

まず(A)から話を始める。次頁の表は(A)に該当する曲目にどのようなものがあるかを、手持ちの我国発売SP盤に基づいて調べた結果をまとめたものである。勿論、網羅はしていない。日本語タイトルは盤面記載に従ったので直訳ではない。この表の内容は我々がコンチネンタル・タンゴについて漠然と抱いているイメージと矛盾はしないと思う。“Il pleut sur la route”や“A garden in Italy”はタイトルはそれぞれフランス語や英語であるが元はドイツの曲である。“By the black sea”は我国発売のSP盤では英語表記になっているが原題はフランス語かドイツ語であろう。こうした例はほかにも多いと思われる。イタリア語のタイトルのもも、それはタイトルだけで、中身はドイツ・タンゴと見なせる。表には示さなかったが、(A)に該当する曲目はヨーロッパ発売のSP盤やLP/CD復刻盤も含めれば数はもっと増える。フランス語のタイトルを持つタンゴは日本ではほとんど知られていないが、調べてみると実は結構多い。

コンチネンタル・タンゴはアルゼンチン・タンゴとは住む世界を全く異にしていたから、アルゼンチン・タンゴとの比較においてコンチネンタル・タンゴを論ずるのは妥当ではない。作品の数も我々が知らないだけで実際にはかなり多いのではないかと思われる。よく聴けば演奏にもそれぞれ個性を感じることもある。コンチネンタル・タンゴだからと言ってそれ程見下げることではないのではないか。もっとも1950年代以降のアルフレド・ハウゼ楽団やその他の楽団のムード音楽化したタンゴ演奏スタイルについては初めに挙げた①、②、③の評価は首肯できるかもしれない。しかしそれがコンチネンタル・タンゴのすべてに当てはまるとも言えないのではないか。(B)、(C)、(D)については次号以降で順次考察して行きたいと思う。

(以下次号)



**ヨーロッパで作曲され、スペイン語以外のヨーロッパ言語(独、仏、英、伊など)のタイトルを持つタンゴ(我国発売SP盤に基づく)
(El tango llamado “Continental Tango”)**

言語	タイトル	作曲者
独	Barbara (バルバラ)(人名)	Siegel
	Blauer Himmel (碧空)	J.Rixner
	Ein Tangomearchen(思ひ出のタンゴ)	F. Raymond
	Eine alte Weise (思ひ出の唄)	W. Richartz
	Es muß wohl etwas um die Liebe sein (愛するためには)	Rixner
	Frauen sind schön, wenn sie lieben (恋せし時は乙女美し)	Malderen
	Ich küß ihre hand, Madam (奥様、お手をどうぞ)	Winkler
	In einer kleiner Konditorei(小さな喫茶店)	H. Jonsson - P. Fago
	Liebst du mich? (愛してる?)	Schmidseder
	Manolita (マノリータ)(人名)	Llossas
	Nachts ging das Telefon(夜ごとの訪なひ)	Kollo
	Schwarze Orchidden(黒い蘭の花)	Rotter - Grothe - Borchert
	Sie hiess Marietta (美しのマリエッタ)	L. Gasucci - Brammer
	Traumtango (夢のタンゴ) (Le tango de reve)	Rebner - Stein
仏	Guitare d'amour (愛のギター)	?
	Il pleut sur la route (小雨降る径) (Auch in trüben Tagen)	Henry Himmel - Robert Champfleury
	Jalousie (目かくし、嫉妬)(英語表記Jealousyもある)	Jacob Gade
英	A garden in Italy (伊太利の庭) (Frühlingtraum)	Valentino - Erwin
	By the black sea (黒海の邊りで)	Rodi
	Love of my longing (君に捧げしわが命)	?
	Romantic serenade (浪漫小夜曲)	Hellmann
Two swallows (夫婦燕)	Brueckner	
伊	Bella Donna (ベラ・ドンナ)	?
	Il reviendra (彼は来る)	Jose Padilla
	Il Tango delle Rose (薔薇のタンゴ)	Schreier-Bottero-Reisman
	Oh, Donna Clara (オ!、ドンナ・クララ)	Peterbuski
	Tango notturno (夜のタンゴ)	Borgmann
	Torna piccina (トルナ・ピツチナ)	C.A. Bixio
Violino Tzigano (夜のバイオリン)	C.A. Bixio	

タンゴ名曲事典の探索

岩垂 司 (札幌市)

嘗て石川浩司さんは「『タンゴ名曲事典』(中南米音楽 1998)は愛好家の常備薬」と言われたが、私にとっては常備薬どころか「宝庫」である。本書は既に出版以来18年を経て、なお「宝庫」たる価値を失っていない。その価値は、名曲の説明の他に、内蔵されているデータの探索から、タンゴの様々な面が見えてくるところにある。ここで宝庫の内部を少し探索してみたい。

先ず基本的な事として、「事典」の編集に当たった5人の方は、当時の我が国のタンゴファンの代表選手で、そこでの曲目とCDの選択は当時の我が国のタンゴファンの好みを反映していると考えて良いだろう。その結果選ばれた894曲の内訳はTango 816、Milonga 31、Valz 34、その他13となっている。本稿でのデータ蒐集の対象は「事典」本誌のみとし、後に追加された補遺版25曲は含まない。更に作曲、演奏については年代の記載のあるもののみを参照した。

1) 作曲家と作曲年代

本書に10曲以上の作品が収録されているのは以下の20人である。

A. Piazzolla 41曲、F. Canaro 39、A. Troilo 24、E. S. Discépolo 24、C. Gardel 21、M. Mores 18、E. Delfino 17、R. Firpo 15、A. Bardi 16、E. Arolas 15、J. D. D. Filiberto 14、J. De Caro 11、O. Fresedo 12、P. Maffia 12、S. Piana 12、P. Laurenz 11、O. Pugliese 10、E. Sciammarella 10、J. Maglio 10、A. Pontier 10。

Piazzollaの作品が多いのは、一般的な人気は別として、作品自体の評価が高いことを示しているのだろう。他の顔ぶれは予想通り古典の作曲家が大勢を占め「まあそうだろうな」という感じである。そしてここに名前を出ている中で、Piazzolla、Mores以外は本書出版時点(1989)で故人である。

本書に収録されている作品を、作曲年代別に分けて示したのが図1である。編集者側としてはなるべく年代別に偏りの生じないように配慮して作業をされたのだろうが、矢張り此処には我が国での古典曲の人氣が窺われる。しかし古典曲は半世紀以上の淘汰を経て生き残った、いわば「サバイバルゲームの勝者」であるのに対して、近・新作は評価が未だ定まらないという面があることも考えなければならぬだろう。そういう状況の中で、80・90年代の作品13曲は発表後間もないにも拘わらず名曲と評価されていることに、作品の質の高さが窺われる。更にこの中にPiazzolla(92年没)の作品が4曲入っているのは、彼が

最後まで優れた作品を発表し続けたことを示している。

2) 作曲三冠王

嘗て高山正彦氏は、1967年のポンティエル来日に際しTango Argentino誌に「タンゴの三冠王」なる一文を寄稿された。そこで氏は楽器の演奏者、楽団の指揮者、作曲家としてそれぞれ一流であることを三冠王の資格とし、ポンティエルを三冠王とした。それに倣って、タンゴ楽団の標準演奏曲種であるタンゴ、ミロンガ、ワルツの3曲種で名曲と言われるほどの作品を書いている人を作曲三冠王とし、「事典」の中から候補を探してみた。

ここで「王」と言うからには作品の数も問題になるだろう。それで「事典」の中に10曲以上の作品が取り上げられている上記21人を候補とした。その中で3曲種に名前が出ているのはPiazzolla (T37, M1, V1,その他2)、Francisco Canaro (T36, M1, V2, その他2)、Troilo (T22, M1, V1)、Piana (T7, M4, V1) の4人である。此処でPianaは作品総数で脱落し、上位3人に絞られるが、PiazzollaはAdiós Noninoという超名曲があるとしても一般人気は必ずしも高くないし、Troiloは基本的には歌の作曲家と言う点で一步譲る感がある。結局我が国で古典曲のファンが多いことを考えて、F.Canaroを作曲三冠王とした。アルゼンチンでは、作曲者の圧倒的「アイドル性」もあり、歌の作者と言うことが有利に働いてTroiloになるだろう。

3) 作詞家

作詞家で10曲以上に名前の出ているのは以下の13名である。

E. Cadícamo 39曲、H. Manzi 27、E. S. Discépolo 22、C. E. Flores 19、J. M. Contursi 17、A. Le Pera 17、C. Castillo 16、O. Expósito 15、F. García Jiménez 14、M. Romero 12、I. Pelay 10、J. Caruso 10、E. Fresedo 10。

作詞家には作曲家との間に「名コンビ」と言われる組み合わせがある。Discépolo-Discépolo 20曲、Gardel-Le Pera 16、Aieta-García Jiménez 8、Canaro-Pelay 8、Cobián-Cadícamo 7、Piazzolla-Ferrer 7、Troilo-C.Castillo 6、Piana-Manzi 6、Rubistein-Rubistein 5、Troilo-Manzi 5 などが知られたコンビである。此処でDiscépoloとRubisteinは特別として作詞・作曲家が同一人物であり、そしてLe Peraの場合は殆どGardelの専属と言っても良いような関係である。これはGardelの映画製作に関係があるのだろう。Emilio Fresedoも殆ど兄貴の専属に近い感じである。一方Expósito兄弟の合作は2曲と少ない。Cadícamo、Manziの両巨頭にコンビ作品の割合が多くないのは、多数の作曲者からの依頼があるからだろうか？

またContursiとCastilloは親子の作品(Pascual 8、José María 17)(José González 2、Cátulo 16)が収録されていて、共に息子が親を凌いでいる。

4) 楽団・歌手

「事典」には曲の解説の下に1～3種のCDが記載されている。見たところでは、編集の時点で入手可能なCDを列挙したらしい。従って此処に掲げられているのが極めつけの名

演奏とは限らない。だが仮にも「名曲事典」に取り上げられているのだから名演奏でない訳はない、独断だが全部名演奏だと思う。

ここで20回以上登場するのは16楽団、歌手で10回以上は10人である。歌手はソリスタとしての登場回数で、楽団付き歌手の場合は数えない。一つの曲にある楽団・歌手が複数回取り上げられている場合には、それぞれ別々に数えた。

楽団：D'Arienzo 142回、Troilo 130、Pugliese 125、Di Sarli 95、Canaro 92、Piazzolla 68、Pirincho 33、Fresedo 32、Lomuto 32、Firpo 32 (orq. 12 + cuart. 17)、Victor 29、De Caro 28、Maglio 25、Caló 25、Salgán 24、Francini-Pontier 22。

歌手：Gardel 113、Rivero 41、Simone 22、Quiroga 19、Lamarque 19、Goyeneche 18、Corsini 17、Magaldi 15、Vargas 14、Maizani 12。

それぞれの演奏には演奏年が記されており、それを年代毎に纏めると図2のようになる。概観すると、1950年代に我が国のレコード界に登場して、我々に大きな感銘を与えた楽団・歌手の演奏が中心になっている感じがする。50年代には各楽団の演奏力が充実し、それにLPの登場もあってそこに出てくる演奏に我々は圧倒された。その時受けた強烈な印象がここに現れているのではないか。

各演奏家については、D'ArienzoとGardelの各1位は我が国の人気から考えて当然として、他の顔ぶれは、順位はともかくとして「想定内」である。Victor、Maglioなどはアルゼンチンでは出てこない名前だろう。そういう意味で、如何にも日本人好みである。この25人のうち、22人の作品が「事典」の中にある。優れた演奏家はまた優れた作曲家でもあるのだ。

またここに名前が出ている人の殆どが本書発行時点（1998）で故人である。当時でもCDを出していた現役の楽団・歌手は沢山いたはずだが、近年の技巧的演奏は好まれなかったのだろう。興味があるのはD'Arienzoの1958年以後の演奏が28回取り上げられていることである。Salamanca脱退（1957）以後のD'Arienzoの演奏は我が国では人気が無いが、1965年以後は好演を連発しており、それが正当に評価されたのだと思う。

5) 鳥

「事典」の中には鳥を題名にした曲が多くある。

曰くAve de paso、Ave sin rumbo、El caburé、El cisne、El pollito、El pollo Ricardo、Gallo ciego、Golondrinas、Halcón negro、Los pájaros perdidos、Palomita blanca、Pájaro ciego、Pájaro azul、Pato、Ya no cantas、chingolo。

鳥が多い理由については、曲の解説を見ても内容はバラバラではっきりしない。たまたま鳥を題名とする曲に名曲が多かったということなのだろう。この中でcaburé、halcón negro、chingoloは日本で見られない鳥である。

以下この3種の鳥について：

Caburé：フクロウ目フクロウ科、学名Glaucidium brasilianum、和名アカスズメフクロウ、最も小さなフクロウのひとつで、体長 15～19cm、体重 45～90g、アメリカ南部の一部から南米のアンデス山脈の東部の熱帯林や公園等に棲息している。スズメフクロウは、

夜明けと日暮時に最も活発に動き、昼間や深夜は寝ていることが多い。愛玩用としても飼育されており、ペットショップで1羽25万円程で売っている。

Halcón negro：タカ目タカ科、学名Spizaetus isidori、和名アカクロクマタカ、森林性の大型の猛禽で、体長はオス約75cm、メス約80cm。翼開長は約160cm～170cm、体重750g、ベネズエラからアルゼンチンにかけてのアンデス山地に棲息している。絶滅危惧IB類に指定されている。

Chingolo：スズメ目ホオジロ科、学名Zonotrichia capensis、和名アカエリシトド、体長13～15cm、体重20～25g。高度600mから4000mの地帯に多く見られるが、ところによってはより低い地点で見られることもある。農耕地、庭園、公園など灌木の多い開けた場所を好み、都市部や郊外にも棲息する。“Ya no cantas, chingolo”に付けられたBianchiの歌詞では今にも絶滅しそうな感じを受けるが、全体として数が減っていることはないとのこと。

余談だが、Gardelの愛称の一つに“El Zorzal Criollo”がある。Zorzalはツグミで、アルゼンチンに棲息するツグミは定住性である。上記の愛称について、大岩、島崎、中島『タンゴ入門』（音楽之友社 1965）に「少年時代につけられた“エル・ソルサル”の愛称は当時のパジャドールとして高名なホセ・ベティノッティによる」とある。歌の上手な少年を鳥になぞらえたのだろう。そうすると“El Zorzal Criollo”はあちこちで見かける「偉大なる渡り鳥」ではなく、単に「アルゼンチンのツグミ」ということではないのか？ Zorzalが「渡り鳥」になったのは、誰かが日本のツグミからの類推で、アルゼンチンのツグミも渡り鳥と思い違いしたのが広まったのだろう。

宝の山の『タンゴ名曲事典』も既に絶版で、古書市場での入手も難しい。これからのタンゴファンのためにも、新情報を加えた『タンゴ名曲事典2』の刊行を期待したい。

図1 年代別曲数

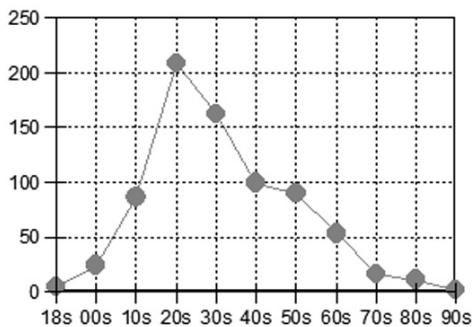
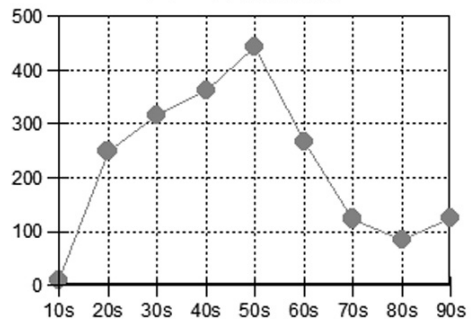


図2 年代別演奏数



米山宏氏を偲んで

島崎 長次郎



当日本タンゴ・アカデミーの発足当時からのベテラン会員だった米山宏氏が、去る7月1日に18年という長い闘病生活をへて、82年の生涯を閉じられた。葬儀は親族によって7月9日（ヌエベ・デ・フリオ）に行われ、9月11日（日）の夕刻、タンゴのサロンとして長年親しまれてきた米山邸の“ディア・オンセ”で、改めて大勢の仲間の手によって、コンサートをメインに、心のこもった、温かい“偲ぶ会”が開かれた。

私が米山さんと親しく話を交わすようになったのは、たしか東京オリンピックの昭和39（1964）年ころだったと思う。大岩さんと一緒に当時住んでおられた高級住宅地の三番町のお宅に伺ったのだが、開口一番に言われたのが、“最近、国内ではどんなタンゴのレコードが出ているのですか？”で、これにはビックリした。つまり、もっぱら外盤を収集していて、国内盤の事情がわからない、と言うのだ。かねてタンゴを日本にはじめて紹介したとされる目賀田網美男爵に師事し、タンゴ評論の草分的存在の高橋忠雄氏の薫陶を受け、慶應大学在学中からタンゴのレコードコンサート活動を続けてきたというだけに、その頃中古レコード店や古道具屋をウロウロしている私のような人間とは一寸“毛並みが違う”とその時思った。偉いのは、それでいながら偉ぶったところが少しもなく、誰にでも優しく柔和に接し、とにかくいつも明るく朗らかな雰囲気を感じさせていた。

米山さんの残された最大の功績は、昭和27（1952）年、わが国最初のラテンアメリカ音楽雑誌「中南米音楽」（現「ラティーナ」）の創刊に深く関わっておられたことだ。高橋忠雄さんを筆頭に、加年松城至、宗像稔、柴田重利などのベテランに伍し、当時まだ学生だった蟹江丈夫、米山宏の両名が加わり、深刻だった資金不足対策をはじめ、用紙調達、楽団の取材、原稿集めなどの多くの困難を一致協力して乗り越え、とにもかくにもこれを実現したことだ。これが導火線になり、その後、日本各地に「中南米音楽」の愛好クラブが続々と誕生し、今日に続くタンゴ・ブームが起こったのはご存知のとおりで、タンゴ・ファンならここはしっかりと銘記しておきたいところだ。

タンゴの好みでいうと、米山さんはどちらかというと高橋忠雄系統に属し、コチコチの古典や、俗に言う“泣き節”とは少し距離を置いた、爽やかで躍動的なものがお好きだったようで、ダリエンソ、デ・アンジェリス、そしてトロイロなどといったあたりをよく話題にされていた。そして、隠れた面ではタンゴとはまったくかけ離れるが、韓国演歌がお好きで、この種の収集したLPはかなりの数にのぼり、何度か聴かせてもらったことがある。特徴はほぼ女性歌手ばかりだったのが印象的ではあったが…。強烈なエレジーを旨とする韓国演歌は、古賀政男に代表される日本歌謡の源流とも言われるように、どちらかというとき明るい曲調を好む米山さんには一見向かないようにも思ったが、やはり米山さんも根っこには紛れもなく日本人のDNAを抱えている、とうれしく思い、いっそう親近感を覚えた。

そんな米山さんが突然脳梗塞で倒れたのは平成10（1998）年の夏ころだったが、気丈な奥様、瑛子（グロリア・米山／NTA会員）さんの18年にも及ぶ献身的な介護で、とにかく最後までタンゴを楽しみ、明るい日常を過ごされたのはなによりだった。

米山さんはとくに記憶のよい方で、そんな病気になってからもかつて盛んだったタンゴの時代の親しかった早川真平、中西義郎、木村喜久弥、高橋忠雄、そして目賀田綱美さんに関する貴重な話を瑛子さんとの対談で聞きだしてもらい、「忘れえぬタンゴの人々」のタイトルで当Tangolandia（2009秋～2012春号）にシリーズで連載させてもらったのを昨日のここのように思いだす。

特筆されるのは、その晩年を飾った米山邸でのタンゴの集い「ディア・オンセ（11日）」の存在だった。これは外出のできないご主人のリハビリに、という瑛子さんの発案で平成13（2001）年の5月にスタートし、NTA会員を中心に毎月11日に40名ほどが集い、名盤に耳を傾け、タンゴ談義に花を咲かせるなど、タンゴ・ファンの何よりの交流の場として定着し、実に15年もの間、楽しく続けられた。参加した人々の中には、米山さんの旧知の大先輩の寺田太作さんをはじめ、大岩祥浩、石川浩司、蟹江丈夫、といった人々も名を連ねていたが、これらの人々もすでに今は亡く、あらためて時の流れ、世の無常を感じざるを得ない。

思い出すのは、毎回のこと、入口の受付の近くの椅子に座り、みんなと一緒に最後までタンゴに耳を傾け、ニコニコして会場を見渡すなど、いつも楽しそうにしていた米山さんの姿だ。奥様の全霊を傾けた介護によって、晩年はこの上なく幸せだったに違いないと思った。

残念ながら、今は遙かな空に旅立ってしまわれたが、楽しかった「ディア・オンセ」の数々の思い出を胸に、きっといつまでも笑顔で奥様の瑛子さんとお二人のお嬢さんを見守ってくださるだろう。

ありがとうございました、米山さん！ 安らかにお休みください。

合掌

ネットで楽しむ様々なタンゴ

松野 初美 (三重県鈴鹿市)

白いレースのカーテン越しに真っ赤なゼラニウムの花が咲き誇り、その情熱を秘めたかのようなタンゴへの思いを馳せて、パソコンに向かってこの記事を書いております。

私のタンゴ歴はかれこれ20数年近くなりますが、主にナチュラルに聴いているのが好きで朝はネットで聴く四日市FMタンゴの放送から始まり、昼は車の運転中だったり夜はベッドサイドで子守歌代わりにタンゴを聴き、いろんなシチュエーションでタンゴは日々の生活に溶け込んでおります。その中で私にとってのタンゴの知識は日本タンゴ・アカデミーの機関誌が勉強部屋となっております、記事を読むことでタンゴへの興味を深めているところです。

今回は「ネットで楽しむ様々なタンゴ」というタイトルを付けましたが、私の「ブログ」を通してタンゴを殆ど知らない方達に向けて一人でも多くタンゴを聴いて貰いたい思いで「タンゴ」を紹介し始めました所、多くの反響が有り嬉しく気を良くしているところです。

こんな楽しみ方をしている会員の居ることも知って頂きたくて、今回投稿文をお引き受けした次第です。どうぞ宜しくお願い致します。

私のパソコン歴は16年でインターネットを始めたのが2000年の秋、丁度「森首相」が「IT革命」を唱え国民に無料講習を実施してくれました。それを切っ掛けに「市のパソコン無料講習」を受けたのですが、最後の講習の時に講師が「絵のソフト」を使ったペイント画を教えてくださいました。ところが私はこのパソコン画に夢中になって以後様々な「ペイント画」を描くようになり現在も続けているところです。

この中でもタンゴ関係のダンス等も描き、過去2回程「Tangolandia」にも掲載して頂きました。

こういった数々のペイント画をネット上に公開したく2013年6月「絵」を中心にした「yahooblog: Sumireの花園」を開設しまして、現在様々な方々と交友関係を楽しんでいるところです。ブログは、ニックネームでそれぞれが自分のブログを持っており、バーチャルの世界での交流ですが。私は東北地方から関東、関西、四国、九州と「プロ友」が出来て楽しんでおります。

そんな中、2016年4月からは「YouTube (動画サイト)」の著作権をyahoo!が取得してくれまして、自分のブログにも反映することが出来るようになりました。

これまでも「タンゴ・ダンス絵」は紹介しておりましたが、早速チャンス到来と「アルゼンチンタンゴ」の曲や動画を私なりの簡単解説を入れて紹介し始めました所、様々なコメントを頂いて嬉しい感触を得るようになったのです。



最初は「ラ・クンパルシータ」でしたが、この曲はタンゴを知らない人でも殆どが知っていました。やはり世界中で知られているだけの事があります。また、「リベルタンゴ」も一般にはよく知られた曲の様でした。

コンチネンタル・タンゴでは、古くはV・フォン・ゲッツイ、マレク・ウェーバー等も紹介。またアルフレッド・ハウゼに関しては多くの方の知る楽団でしたが、まだまだ「タンゴ」はメジャーな音楽ではないと痛感したものです。もっとタンゴに親しんで貰いたいと言う思いで一杯でした。

最近ではYouTubeでも「アルゼンチン、コンチネンタル」と沢山の動画演奏を見ることが出来るようになりました。「J. ダリエンソ楽団」の15 grandes Éxitos Instrumentalesは1958年から63年のものでバンドネオンは「C. ラサリ」で40分から60分以上の演奏動画や、「C. ディ・サルリ楽団」や他の巨匠達のGrandes Éxitos等々、30分から60分以上の動画演奏が聴けるようになりました（画面はOrq. のメンバーの静止写真が多い）。「カナロ」「ピアジ」「デ・アンジェリス」「トロイロ」「プグリエーセ」「フレセド」と、数え上げたら切りがない程です。また、「ティタ・メレージョ」の歌の動画（モノクロ）、ブエノスアイレスのタンゴショー「ピエホ・アルマセン」や「タコネアンド」等々、華麗なダンスや曲など見る事が出来堪能させられます。今やネットでも楽しめるタンゴ、曲の多さにはびっくりさせられると共に嬉しくなります。またこれらの動画の投稿者はアルゼンチンからの様です。

最近では嘗てNHK.BSテレビで放映された「遥かなるアルゼンチンタンゴ—魅惑の世界」はご覧になられた方も多いかと思いますが、38分に分かりやすく纏められていてタンゴの歴史に十分触れることが出来ました。

この「遥かなるアルゼンチンタンゴ—魅惑の世界」を私のブログでも紹介しましたが、様々なコメントを戴きました。バンドネオンの楽器も知らない方が多くアコーディオンと混同されていた人もおりました。

いまやネット社会、YouTube（動画サイト）で聴くタンゴは時間の許す限り手軽に楽しむことが出来、午後のひととき香り立つコーヒーを側に私はPCの画面を拡大し音響効果も良いタンゴを聴き、しばし至福の時間を楽しんでおります。

それでは比較的聴きやすく馴染みやすい、ダンスの入ったタンゴを選び（一曲ずつの）、

ブログで取り上げたタンゴを紹介致します。「ラ・クンバルシータ、エル・アマネセル、チケー、シルエータ・ポルテーニャ、アスタ・シエンプレ・アモール、フェリシア、オルガニート・デ・ラ・タルデ・・・」他数々で、沢山の方達からコメントを戴きました。その中から少しご紹介したいと思います。

- ・昔ラジオで「これがタンゴだ」を聴いていたので懐かしくまた聴いてみたくなりました。
- ・今迄タンゴについては詳しくなかったけれど、いろいろと知ることが出来ました。
- ・タンゴのリズム、気分が晴れ晴れして気持ちいいですね。
- ・心揺らぐ音楽ですね。
- ・タンゴ好きになりました。
- ・タンゴの情熱的なリズムに惹き付けられます。
- ・何時もタンゴの曲を聴かせて下さってタンゴは余り知らなかったので勉強になります。
- ・タンゴは自分には少し難しいけれど、分かりやすい解説が大変勉強になります。
- ・「たそがれのオルガニート」・・・いい曲ですね。
- ・情熱の曲を感じる事が出来ました。タンゴは緑の中で育った私には新鮮です。

最後に、私はまだまだ「ブログ」を続ける限りタンゴを紹介していきたく情熱を燃やしているこの頃です。

日本タンゴ・アカデミーのウェブ・サイトがリニューアル

前号でお知らせしました、日本タンゴ・アカデミーのウェブ・サイトのリニューアルの進行具合について報告します。

7月の時点で、インターネット掲示板機能（BBS）と資料DL機能（資料BBS）の構成を練り、アカデミーのウェブ・サイトへの合わせこみを行っているところであると一報しました。本来であれば、すでにオープンしている予定ですが、この合わせこみ作業に手間取りオープンが遅れています。誰でも読めて資料を入手することはできますが、書き込みをするには名前とメール・アドレスの登録をしていただくことを必須としています（ウェブを荒らされることのないように）が、この登録機能の作りこみに手間取っています。すでにコンテンツ案は揃ってきているので、開設の遅れをお詫びし、年内のオープンをめざし取り組んでいることをお知らせします。

（山本幸洋）

タンゴ

～ 出会い、きっかけ～

後藤 武 (さいたま市)

「きっかけ」という言葉がある辞書で引いてみると、「物事を始めるはずみとなる機会や手がかり」と説明されている。

タンゴを楽しむようになったのは、2008年（平成20年）に退職後の勤務先であるさいたま市立のA公民館で、島崎長次郎氏、吉田義之氏と出会ったことがきっかけである。島崎氏は当時NTA会長（現名誉会長）であり、公民館の「魅惑のタンゴ～音と映像で楽しむタンゴ講座」の講師であった。吉田氏もNTA会員（現役員）であり、二人で市内のいろいろな公民館でタンゴ講座を担当されていた。



この出会いがきっかけで、タンゴに少しずつ興味が湧くようになり、3年後に市内のタンゴ同好会に入会した。そして、月1回の例会に参加してタンゴを楽しむようになった。例会では回ごとにテーマが設定されており、博識あるコメンテーターの選曲及び解説を通してタンゴの奥深さを徐々に感じるようになった。タンゴ同好会への入会がきっかけとなり、市外で開催されているタンゴ同好会に参加したり、演奏会に足を運んだりするようになった。

6年間で3つの公民館に勤務したが、どの公民館でもタンゴ講座には定員を超える多くの参加者があり、人気のほどが窺えた。また、講座終了後にアンケートをとったところ、どの公民館でも次のようなことが書かれていた。

- ・青春時代のことが、思い出されて胸が熱くなった。
- ・哀愁を感じさせ、心を打つものがある。
- ・曲を聴いていると、体が自然に踊り出すような感覚になる。
- ・日本の歌謡曲〔演歌〕に共通するところがあり、何か親近感がある。

これらのアンケート結果から、タンゴには日本人にとって、親しみやすく受け入れられる何かがあるのではないかと考えている。タンゴ講座は公民館の1講座ではあるが、一人でも多くの方がタンゴに興味をもち、タンゴに親しむきっかけになってくれたらこんな嬉しいことはない。

ところで、市外のタンゴ同好会に参加する中で、NTAへの入会を勧められた。当初、

N T Aへ入会するかどうか躊躇したのが正直なところである。それは、タンゴについて何の知識も無い自分が、全国組織のN T Aへ入会することが可能かということであった。しかし、2016年（平成28年）に思い切って入会した。そのことにより、「東京リンコン（タンゴ談話室）」や「タンゴセミナー」等に参加できる機会に恵まれた。タンゴを聴いたり、コメンテーターの解説を聴いたり、歌手の歌を聴いたりすることを通して、楽しみながら大いに勉強させてもらっている。

また、タンゴの会に参加することを通して多くの方と関われる機会に恵まれ、退職後の生き甲斐にもなっている。まさに、『タンゴ～出会い、きっかけ～』である。

機関誌には多くの方がこれまで蓄積された専門的な立場で、すばらしい原稿を書かれている。しかし、本原稿はタンゴとの出会いを書いたものに過ぎない。ただ、素人の私があるきっかけでN T Aに入会し、タンゴに親しんでいることは事実である。

なお、金子祐一氏はA公民館の元同僚であり、同じきっかけで同時期にN T Aに入会している。

Sayacaの新作CD発売

会員のSayacaさんが2枚目の新作CDを発表した。タイトルは『Trío Celeste & Sayaca』（青空を駆けるように！）の意味。メンバーは青木菜穂子（Pf）北村聡（Bn）田中伸司（Cb）。ジャケットはアルゼンチンの空をイメージしたもの。Sayacaが師事したアメリータ・バルタール（歌手）、ディエゴ・スキーシ（ピアニスト）からも絶賛されたCDです。曲目は彼女の18番でもある「Milonga de la anunciación（受胎告知のミロンガ）」や珍しい日本の「水色のワルツ」などが入っている。Sayacaの歌の情熱が伝わってくる貴重なCDです。

（お問い合わせ先：trioceleste.sayaca@gmail.com）





タンゴに出会って元気です

専光 しのぶ (小金井市)



タンゴって何??? 何でタンゴ???

何故かタンゴバイオリニストになってしまった息子(専光秀紀)が、中学生になった頃にピアノソラのサイコロのようなパッケージのDVDを買い込み、勝手にバンドメンバーになりDVDと一緒に家で演奏し始めた時の感想でした。

これが、私がタンゴをタンゴと意識して聞いたタンゴとの出会いです。

3歳でクラシックバイオリンを始めた(始めさせられた?)息子が、小学校でポップスに出会い、中学生でハードロックに興味を持ち、行きついたのがタンゴでした。そして東京音楽大学在学中に、小松亮太さんのコンサートでDVDにサインを頂く列に並びお話ししたのがご縁で、次の年のツアーに参加させて頂いたのが秀紀のプロとしての初めての仕事です。

大学を卒業してからはタンゴ以外には興味が無く、自分なりにタンゴの勉強を重ね、色々な方に出会い、演奏活動を重ねて来たので、家の中には毎日タンゴが流れていました。ライブがあると聞けば聴きには行きましたが、数年前までは私自身が特にタンゴに興味を持つことは無く、何でタンゴ???と思いつけていました。

息子の話は長くなりますのでここまでに致しますが、運命的に中学生でタンゴに出会ってから、タンゴから1ミリも離れることなく現在に至ります。

ある日オーケスタ横浜で演奏させて頂くようになった息子に、マエストロ齋藤先生が「お母さん、聴きに来ないの」って言って下さっていると言われて、6年位前の5月5日開港記念会館で初めてオーケスタ横浜のタンゴを聴かせて頂きました。

これがご縁でオーケスタ横浜のお手伝いもさせて頂くようになり、お話上手な齋藤先生からアルゼンチンタンゴ楽団の歴史や楽曲の楽しいお話を伺う機会が増えました。

齋藤先生のタンゴに対する情熱も知識も素晴らしく、ご自分の歩んで来られたタンゴ人生のお話は大変興味深く、何も知らない私でも毎回お話が楽しみになりました。

まだまだタンゴの事は良く分からない事が多い私ですが、齋藤先生から日本タンゴ・アカデミーをご紹介頂き、レココンやリンコン等に参加してアカデミーの皆様のお話を伺う機会も楽しみになり、私の知識も少しずつ増えて、より一層タンゴが楽しくなって来まし

た。知識も増えて興味を持って聴くようになれば、タンゴはとても素敵で良い曲が多くあり、段々とタンゴに魅せられるようになりました。

初めはタンゴを聴くだけでしたが、オルケスタ横浜のコンサートでのダンスのデモンストレーションを見たのが、タンゴダンスとの出会いです。

何も知らない私ですからダンスはショーダンスだけかと思っていましたが、ミロンガというダンスパーティーもある、と教えて頂くようになって「ふうん、タンゴだけを踊る人達がいるんだあ」が感想で、どんなダンスも踊った事が無い私なんぞにタンゴが踊れるわけがないと思い、初めはダンスに興味を持ちませんでした。

ある日齋藤先生が、「あんたもバイオリン弾かない？」(勿論オルケスタ横浜ではありません、趣味としてです)と仰ったのがきっかけで、何かタンゴで私に出来ることはあるかなあ、と考えました。

バイオリンは専光秀紀より上手く弾ける訳がないので問題外、3歳からの幼児期に偉そうに高圧的な態度で毎日練習をさせてきた私としては弾く訳にはいきません。

年齢を重ね、日々体の衰えを感じるようになってきた時期でもあり、運動不足の改善をしなくては、どんどん坂を転げ落ちるように体力が低下するなあ、と恐れていたこともあり、「ダンス、、、なら自分なりに出来るかもしれない、一石二鳥だわ」と思い、早速友人を引きずり込んで一緒に行ける時間に初心者を教えて下さるスタジオをPCのインターネット検索で探して通いだしました。

始めてみれば、タンゴダンスはゆっくりと歩く動きで踊れるダンスで、年齢は関係なく始めた時から生きている限り、楽しんで踊り続ける事が出来ると気がきました。男性のリードで踊る即興の踊りなので、ご迷惑を掛けないように基本から習う事は必要かもしれませんが、リードについて行く事を覚えれば、タンゴの音楽に合わせて踊るのはとても楽しい筋トレです。

始める前は片足で立ち靴下を履くのも危なくなってきましたが、すっかり足腰が強くなり、以前より姿勢も良くなりました。楽しく踊っているだけで足腰や腹筋背筋が知らず知らずのうちに鍛えられ、自然と体が若返ります。

ジムでのトレーニングをしてみた事もありますが、我慢して鍛えると感じてしまうので、私には向かずに長続きしませんでした。

音楽に合わせて体を動かすタンゴダンスはとても楽しいので、レッスンもミロンガも待ち遠しくなります。

ダンスを習い始めて4年近くになりますが、初めてご指導下さったジョルジュ&リタ先生から、棚田晃吉&典子先生、荒木&まゆみ先生、マルティン&ユカ先生、佐藤利幸先生、ルシア&アレハンドロ先生、エディソン&タチアナ先生、ダニエル&アグスティーナ先生、他多くの素晴らしい先生方に丁寧に熱心に教えて頂き、レッスンやミロンガでは多くの男

性に踊って頂き、皆様のお蔭でとても楽しめるようになって来ました。

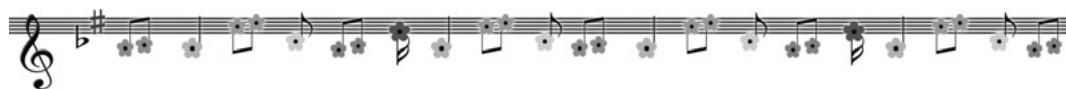
何も知らずに行き当たりばったりで始めましたが、東京にはタンゴスタジオや同好会も多くあり、求めればどの先生も熱心にご指導下さり、毎日のようにミロンガもありますので何時でも楽しめます。先生方は日本中そして世界中にお出かけになり、デモンストレーションをなさったり、ご指導下さいます。アルゼンチンからも多くの先生方が来日されて、達者な日本語でレッスンをなさいます。益々良い環境に恵まれ感謝です。

少し踊れるようになると欲も出て、綺麗に踊るにはどうすれば良いのかなあ、良いコネクションを取るにはどうしたらよいのかなあ、リードを感じられるアンテナを良くしたいなあ、などまだまだ勉強したい事もたくさん出てきました。楽しみながら健康維持が出来るタンゴダンスに出会えて本当に良かったなと思います。

子供も社会人になり、人生ここまで来るとそんなに楽しい事はもう残っていないのではないかと思っていましたが、タンゴに出会えたことで歳を重ねても残りの人生も健康で楽しく過ごせそうだと感じるようになりました。

タンゴに引き込んで魅力を教えて下さった齋藤先生、タンゴに連れて来てくれた息子にも感謝です。皆様も是非、一緒にタンゴを踊って健康に長生き致しましょう！





2016東北リンコン・タンゴセミナーのおしらせ

佐藤 勝夫



昨年、参加者から好評であった東北リンコンを今年は盛岡市で開催いたします。東北で唯一常時本格的なタンゴ演奏で地元根付いているライブレストラン「アンサンブル」が会場です。

お店はバンドネオン奏者の森川ともゆきさんが盛岡で1979年に開店しております。その間、若手ピアニストが大勢この地から育ち、現在中央で活躍しております。

今回はバンドネオン、ヴァイオリン、ピアノのトリオの演奏を楽しみながら、東北地区の会員が思いをよせるタンゴを披露します。また、名誉会長の島崎長次郎氏をコメンテーターとして招き、生誕100年特別CD「ラ・クンパルシータ」の講話を予定お願いしております。晩秋のひとつき、自然豊かな盛岡市に是非、足を運んでくださるようにご案内いたします。

- **と き**・・・2016年11月24日（木）JR「大人の休日倶楽部」*フリー対象日
- **と ころ**・・・盛岡市大町ウエビル5F ライブ・レストラン「アンサンブル」
Tel: 019-652-3323 <http://morioka-ensemble.sakura.ne.jp/info/>
*交通手段・・・東京から新幹線2時間、盛岡駅から徒歩10分。
- **じ かん**・・・受付 13時から開場 ~ 13時30分開演 ~ 17時30分まで
- **か い ひ**・・・日帰り：2000円（ドリンクとケーキ付）
懇親会参加者：8000円（アンサンブル・ディナー・コース+飲食）
- **セミナー・テーマは**・・・
第一部 タンゴ・セミナー
「世界を駆け巡ったラ・クンパルシータ」
講話：名誉会長島崎長次郎氏
第二部 演奏会 出演「アンサンブル」
トリオ演奏：Bn：森川ともゆき、Vi：花田慶子、
Pf：高田かおり
第三部 東北、北海道地区会員による2曲選！



主催：日本タンゴ・アカデミー 共催：東北地区タンゴ愛好会

NTA主催のタンゴダンスと歌のレッスン

日本タンゴ・アカデミー (NTA) が主催するアルゼンチン・タンゴダンスのレッスン及び練習会を10月からスタートし、タンゴの歌のレッスンを11月から開催致します。

「タンゴは足から始まった」と言われるが、音楽がかかれば踊りたくなるのが、人間の自然な本能。タンゴダンスは競うものでも、人に見せるものでもない。自分と相手の二人だけのもの。「もう歳だから」ではなく歳だからこそ味わいのある踊りが出来るのです。心を癒す音楽に陶醉し、心地よい静かな踊りをするのは精神的にも良く、健康の増進、老化防止にも科学的に効き目がある事は、ブエノスアイレスのタンゴ療法国際学会でも認められています。60、70歳過ぎのタンゴマニアの人がタンゴダンスを経験して、初めてその楽しさを体得して、タンゴに対する考え方が変わったと言う人が何人もいます。これからの人生の健康維持のためにも今からでもタンゴダンスを始めてみてはいかがでしょうか。

「タンゴは歌と演奏とダンスの三位一体である」とも言われます。歌を歌う事もまた同様に人間の自然の本能であり、精神性の高揚とストレス発散に効き目がある事はカラオケ好きの人には良くお判りでしょう。カラオケを歌うのもいいですが、タンゴ・ファンならば皆で一緒にタンゴの歌を歌うのもきっと楽しい筈です。タンゴのソロ歌手を育てるレッスンではありません。あくまでも皆で一緒にタンゴの歌を歌う楽しみを経験する喜びを知るためのものであり、昔の「うたごえ喫茶」みたいなものです。

ダンスはあくまでも基本中心のレッスンを行い、ダンス歴の長い方は自分の踊りを正しく矯正するために、初心者の方も基本から学ぶ事が出来ます。タンゴの歌も基本的な発声練習から始め、スペイン語の発音と意味を大切に学びます。ダンスも歌もグループ・レッスンで趣味として楽しむために、そして受講者の親睦を兼ねた「楽しいタンゴ人生」を皆さんと共有する事をモットーにしています。

会場 港区生涯学習センター (Tel 03-3431-1606)
(JR新橋駅烏森口から徒歩2分)

ダンスのレッスン及び練習会 (305号室)

歌のレッスン及び練習会 (301号室)

講師 佐藤利幸 & 菜穂子
(TANGO PLANET主宰)

日程 月2回月曜日の午後

時間 13:30 ~ 14:30 (レッスン)
14:30 ~ 16:30 (練習会)

会費 1回 1,500円

予定 10月3日、10月17日、11月7日
11月14日、12月5日、12月26日
1月9日、1月23日

講師 高橋トク子
(元高橋ミュージック・アカデミー主宰)

日程 月2回火曜日の午後

時間 13:30 ~ 15:30

会費 1回 1,500円

予定 11月22日、12月6日、12月13日
1月10日、1月24日

お問い合わせ

宮本政樹 090-4002-2571 弓田綾子 080-1080-9179



第19回 東京バンドネオン倶楽部演奏会 を聴いて



大澤 寛

(文中敬称略)

2016年8月20日16時開演。場所新宿角筈区民ホール。雷が鳴ったり陽が射したりの不安定な天気だが満席。技術の高いアマチュアグループを手練れのプロが支えるという心地よいコラボレーションに魅せられる。このグループを育て、共に歩んできた小松亮太が語る通り、商業的な目的を追求しなければならないプロの世界では取り上げられないような知名度の低い曲や難曲とされるものが必ず何曲か対象となっていて、プロの演奏家にとって心地よい刺激が得られる場になっているのだろう。

第1部のテーマは「コンテンポラリーの巨匠たちへ」というもの。存命の巨匠たちの作品を対象として練習を開始したが Luis Stazo、Mariano Mores が相次いで他界し、そしてこの日 Horacio Salgán の訃報が届いた。

(曲 目)

1. 「Bandola* triste」(悲しきバンドネオン) 曲：Raúl Garelló
(*bandolaはマンドリンを指すが、タンゴの世界ではバンドネオンのこと。Apología tanguera の歌詞にも出て来る)
2. 「La llamó silbando」(口笛であの娘を呼んだ) 曲：Horacio Salgán
3. 「Cuando habla el bandoneón」(バンドネオンが語る時) 曲：Luis Stazo & Jorge Caldara
4. 「El llorón」(泣き虫) 原作曲者は不明とされる古い曲。昭和30年代に放送された番組“これがタンゴだ”のテーマ曲だったもの。ピアノの熊田洋の編曲による。
5. 「Adiós, pampa mía」(さらば草原よ) 曲：Mariano Mores KaZZma が歌う。
6. 「Nido gaucho」(ガウチョの^{ねぐら}塹) 曲：Carlos Di Sarli 続けてKaZZma の歌。
7. 「真珠とりのタンゴ」よく知られたオペラの挿入歌をバンドネオン奏者 Dino Saluzzi が編曲したもの。
8. 「Amanecer ciudadano」(都会の夜明け) 曲：V́ctor Lavallén
9. 「Taquito militar」(軍靴の響き) 曲：Mariano Mores 編曲はJuan José Mosalini 小松亮太は“Mosalini が難しくした編曲”だと言うが堂々たる演奏。
10. 「Fortín cero」(ゼロ砦) 曲：José Colángelo

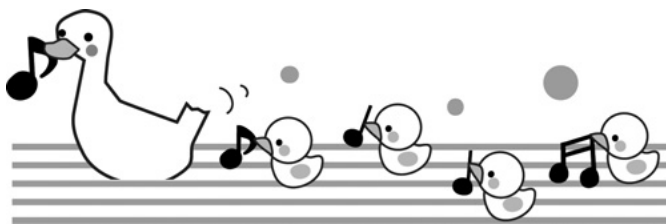
いつものことだが小松亮太が“出演者が交替する際の舞台装置の取り換えの間のつなぎ”

だと言って歯切れのいい進行役を務めている。新しい出演者の緊張をほぐす効果も大きいのだろう。

第2部は「アニーバル・トロイロへのオマージュ」

1. 「Danzalín」(踊り子) 曲：Julián Plaza
2. 「Desencuentro」(破曲) 曲：Aníbal Troilo KaZZma の歌。
3. 「Una canción」(唄ひとつ) 曲：Aníbal Troilo 音量を増したKaZZma が余裕を持って抑えて歌う。
4. 「Mi viejo reloj」(私の古時計) 曲：Osvaldo Fresedo 編曲：Argentino Galván
5. 「Nocturno a mi barrio」(我が街へのノクターン) Troilo の自作自演の語りものの傑作。今日ゲスト出演の予定だった阿保郁夫に替わって小松亮太が日本語訳を語る。KaZZmaがここではギター伴奏を務める。
6. 「Fechoría」(いたずら) Troiloの曲をRaúl Garelló が編曲したもの。こういう曲が聴けるのもこの倶楽部ならではの感がある。
7. 「Tanguando」曲：Ástor Piazzolla 1950年代にTroilo 楽団の編曲者だったPiazzolla の実験的な作品。発表当時は“これでは踊れない”というブーイングが起きたという。今日この1曲のために応援に参加している佐竹尚史のボンゴが響き渡る。
8. 「Nostalgias」(郷愁) 曲：Juan Carlos Cobián 編曲：Ástor Piazzolla 小松亮太によればPiazzolla がTroilo 楽団のために編曲したが当時は演奏されないままに死蔵されていた楽譜らしく“ひょっとすると世界初演”だとのこと。歌はKaZZma。
9. 「Triunfal」(勝利) 曲：Ástor Piazzolla
これまた普段はあまり聴くことが出来ないものの一つだろう。文字どおり悼尾を飾る圧巻のバンドネオン演奏だった。
そしてアンコールに答えて「Volver」をKaZZma が歌い上げた。

なお9月11日には杉並区のセッション杉並で再演される。そして今月末にはこの倶楽部は韓国のソウルを訪問して現地の演奏家グループと交歓・共演する。交流の輪が更に広がるだろう。益々の発展を心からお祈りする。(2016年8月21日記)



池田みさ子と

オルケスタ・オルテンシア

内幸町ホールに初登場



笠井 正史

昨年の2015アルゼンチン・タンゴ早慶戦にゲストとしてデビューした池田みさ子とオルケスタ・オルテンシアが、去る9月2日都心の千代田区立内幸町ホールに華々しく登場した。今回は一部のメンバー交替はあったが、全員美女揃いの六重奏団で、マエストロでピアノの池田みさ子（NTA会員）、バンドネオン川波幸恵と海上亞佑巳、バイオリン鈴木慶子（NTA会員）と瀬尾鮎子、コントラバス富加代子の6名、これに加えて、歌手はSayaca（NTA会員）、ダンスはEnrique&Carolinaといった顔ぶれで、何やらNTAの演奏部門が立ち上がったような感さえあった。

第1部はファン・ダリエンソメドレーで始まり、「巴里のカナロ」「エル・チョコロ」「タンゲラ」「オルガ」と続けた後、歌手のSayacaの登場で、「スール（南）」「トレンサス（お下げ髪）」の2曲、そしてお馴染みの「ジェラシー」が続いた。ここで、池田みさ子のコンサートにはつきものの日本の歌謡曲から1曲の番で、今回は瀬川瑛子のヒット曲「命くれない」のタンゴバージョンを披露し、10曲目は父君のバンドネオン奏者であった池田光夫を偲んで「バンドネオンの嘆き」で締めくくった。

第2部はまず、バイオリンの鈴木慶子と瀬尾鮎子がホール後方の左右から名曲「チャルダッシュ」を弾きながら登場し、雰囲気最高潮となった処で、御大の池田みさ子のピアノをフィーチャーした「ジューピア・デ・エストレージャス（降る星の如く）」の後、池田のコンサートでは必ず演奏される池田光夫作曲の「二人だけの夜」が今回も披露された。その後はアストル・ピアソラ作品から3曲、「ブエノスアイレスの冬」「リベルタンゴ」そしてSayacaの歌入りで「受胎告知のミロンガ」が演奏されたが、とかく古典タンゴ愛好家の多い高老年のコンサートにしてはこうしたピアソラの曲目も抵抗なく受け入れられていた。ピアソラの後には再びSayacaの歌で邦題「群衆」となっている「ケ・ナディエ・セーパ・ミ・スフリール」、続いて比較的新しいホセ・コランジェロの「フォルティン・セロ」、「荒城の月」「エル・ウラカン（台風）」と10曲演奏した後、当然のこと乍ら「オートラ！」に代えて「ラ・クンパルシータ」でお開きとなった。

今回の主催はNTA会員で毎年アルゼンチン・タンゴ早慶戦の実行委員を務めている星野陸郎氏の（株）パス・コミュニケーションズで、同社の文化事業部が開催企画、チケットの販売からコンサートの舞台の裏表まで全てをこなし、今後のタンゴ・コンサートを設営するための礎となったのではないかと思われる。

SOUL OF TANGO FROM BsAs

笠井 正史



現在ブエノスアイレスで、オルケスタ・サンサーシ他の楽団のバンドネオン奏者として活躍している奥村友紀（おくむら・ゆうき）が一時帰国で東京に立ち寄ったのを好機として、9月9日に“SOUL OF TANGO FROM BsAs”と題して1日だけのライブが開催された。会場は成城学園のカフェ・ブルマンという極めて小さなライブハウスであったが、飯塚会長夫妻はじめNTA会員や、タンゴ・ワセダ、ラティーナのメンバーなど多数駆けつけ、20名そここの会場は文字通り満席の盛況であった。

今回は奥村友紀とブエノスアイレス時代から親交のあったNTA会員土方孝人氏のプロデュースによるもので、奥村友紀とピアノの青木菜穂子とバイオリンの吉田篤が臨時編成のトリオを組んだ豪華版で、まさにカブリツキで名演を聴くという結構な催しとなった。

9月号のラティーナ誌上でも西村秀人、土方孝人両氏の協力で、エスクエラ・デ・タンゴのことが紹介されているが、そこで研鑽を積んだ日本人アーティストの中の二人が奥村友紀と青木菜穂子で、謂わば兄弟（この際は姉弟と言うべきかも知れない）共演という訳であった。これに名にし負うバイオリンの吉田篤が加わったトリオで、奥村自身「あの吉田篤さんと共演できたこと」を大変感激していた。

プログラムは「A PEDRO MAFFIA」で始まり、1曲ごとに奥村の語り、というかブエノスアイレスでの経験談や、嘗てアストロリコの門奈紀生氏に師事したことなどを紹介しながら、最後の「QUEJAS DE BANDONEÓN」で演奏終了となったが、「オートラ！」の掛け声に対し、今回限られた時間の準備のためこれ以上の曲目を用意していない由で、この日の1曲目の「A PEDRO MAFFIA」を青木菜穂子とのデュオで演奏し、お開きとなった。

奥村友紀の活躍の舞台はブエノスアイレスであるためか、日本ではまだそれ程よく知られていないが、土方孝人氏から提供された情報によると、大阪府出身で関西学院大学を卒業後、2001年より京都でオルケスタ・アストロリコを率いる門奈紀生氏に師事してバンドネオンを始めたとのことである。

2008年にアルゼンチンに渡り、ブエノスアイレス市立エスクエラ・デ・タンゴに入門し、

ネストル・マルコーニの下で研鑽を積み、2009年卒業後はプロのバンドネオン奏者として、ブエノスアイレスの幾つかのオーケストラで活動を開始した。主な活動先を概略すると、

ORQUESTA SANS SOUCI

ミゲル・カロー及びオスマール・マデルナのアレンジを採用して演奏する楽団で、ミロンガ・オーケストラとして各地のミロンガで引っ張りだこの人気を博している。2014年にはCDを録音しているが、奥村はそれに参加している。

奥村自身の語りの中で、彼の体形の故かよく「アニバル・トロイロ」を彷彿させると言われているようで、本人も大変満足しているようであった。確かに演奏曲目でもトロイロものを多く取り上げている。また最近発足したオーケストラ・ピチューコにも正規メンバーとして参加しているとのことである。

ORQUESTA ARIEL ARDIT

このオーケストラはアリエル・アルディットというオーケストラ・エル・アランケの元ボーカルが中心になって始めたユニットである。オーケストラの名称はアリエルを付しているが、音楽監督はピアノのアンドレス・リネツキーが務めている。創設時のバンドネオン奏者はフェデリコ・ペレイロとレナート・ベントリーニであったが、その後ラミーロ・ボエロと奥村友紀に交代した。現在奥村は第二バンドネオンという訳である。この楽団のCDは何枚か出ているようであるが、DVD付きの2枚組とアニバル・トロイロ追悼アルバムには奥村も参加している。

ORQUESTA PICHUCO

一昨年からスタートした若手のオーケストラで、音楽監督はレナート・ベントリーニが務めている。このオーケストラのコンセプトは「アニバル・トロイロなき現在、トロイロの音が消えたことに危機感を覚えた若手が、トロイロ楽団の編成で、トロイロのレパートリーの曲を、トロイロが採用したアレンジで再現し、現代的意義を問う」というものだそうである。まさに「ピチューコのオーケストラ」という訳である。そもそも奥村友紀の風貌から、しばしば「ピチューコのような」と言われるそうで、奥村自身もそのことに大変満足しているとのことである。

日本ではまだまだ知られていない奥村友紀であるが、タンゴの本場で現地のアルティスタと腕を競うことで確かな技量を身に着けていることは今回のライブで十分認識された。ブエノスアイレスでの今後の活躍と再度の帰国公演を期待したい。



カフェ・ブルマンで熱演するトリオ

タンゴの豊かさと永遠性

—『ラ・クンパルシータ全集』を聴いて—

大類 善啓 (葛飾区)

「タンゴといえばラ・クンパルシータ。ラ・クンパルシータといえばタンゴの名曲」と、決まり文句のように言われるラ・クンパルシータはタンゴファンでなくとも、タンゴの曲名だと知られているほどポピュラーな曲だ。それ故だろう、大衆的な音楽愛好団体がアルゼンチンから招聘するタンゴ楽団のコンサートでの最後の曲がいつもラ・クンパルシータだ。この曲が流れ出すと、とりわけタンゴ通とも思えない多くの聴衆からは、このステージも最後の曲かと拍手喝采だ。

タンゴ通はそんな風景をやや冷やかに見るか、微笑ましく見る。そんなこともあってか、タンゴ通を少々自称する人たちからは、この曲を嫌いと言われたり、敬遠されたり、時に疎んじられる。しかしともあれ、最も多くの人たちに知られているこの曲の名演奏50曲がCD 2枚組の『ラ・クンパルシータ全集』として、このほどオーディオパークから発売された。収録されたすべては日本タンゴ・アカデミー名誉会長・島崎長次郎氏の秘蔵コレクションからである。

ディスク1はアルゼンチン編。最初はロベルト・フィルボ楽団、1916年の録音だ。

26年録音のペドロ・マフィアとペドロ・ラウレンスのバンドネオン二重奏に続いてカルロス・ガルデルの歌、そして夢破れた男の人生を切々と感じさせるロベルト・ディアスの歌、「端然として格調が高く、聴くたびに新たな感動が聴くものを揺さぶる」(島崎氏) カジエタノ・プグリシ楽団、少々のノイズも歴史を感じさせる29年の録音だ。

フリオ・デ・カロ、フランシスコ・カナロ、フランシスコ・ロムート、アンヘル・ダゴスティーノ楽団ではアンヘル・バルガスがワンコーラスだけ歌っている。ピアノの連打の後に続くバイオリンのピッチカットが響くエンリケ・ロドリゲス楽団、トロイロとグレラ四重奏楽団の演奏では「ブラボー！」思わず声を出してしまう。ニコラス・ダレッサンドロ六重奏団の熱い演奏、エドムンド・リベーロの歌に続いてフリオ・ソーサが全編レシタード(吟唱)だ。亡くなる3年前、61年の録音のもの。伴奏はレオポルド・フェデリコの演奏である。

CD 2には、ピアノソラ、トロイロ、ダリエンソ、ディ・サルリ、プグリエーセの演奏。時には、ジャズ歌手ダイナ・ショアーが英語で歌っている曲もある。そして日本からは奥田良三が日本語で朗々と歌い、櫻井潔楽団で柴田陸陸が歌い、また淡谷のり子、黒木曜子、そして藤沢嵐子と、個性あるタンゴ楽団や歌い手たちが唄うラ・クンパルシータ。演奏パターンも違い、実にバラエティーに富んでいる。ぜひそれぞれの個性を聴き比べてほしい。

思えば、1917年のロシア革命、ナチスの台頭、第二次大戦、そしてアプレ・ゲールと言われた時代、激動する20世紀の歴史の中、ずっと人々からラ・クンパルシータは愛されてきたのだろう。そして改めて、ラ・クンパルシータの魅力を思い、名曲である所以を実感するだろう。同時にタンゴの歴史をしみじみと思う。タンゴファン必携の全集である。

会員の広場

●「ラ・クンパルシータ全集」を聴いて

赤田 弘子 (秋田市)

最初、この「ラ・クンパルシータ全集」を手にしたとき、いくら名曲といっても、同じ曲を飽きずに50曲も続けて聴くことができるだろうか、と正直に思いました。ところがCDプレーヤーをスタートさせると、2枚の50曲を通して聴き、さらにもう1回50曲を連続で一気に聴き、なんと都合100曲をアツという間に聴いてしまったのだから自分ながらビックリです。こんなことは今までになかったことで、本当に信じられない思いです。

最初の回は多少ノイズはあるものの、温もりのあるロベルト・フィルポ以下の哀愁に惹かれ、次々の個性あふれた懐かしい演奏に魅せられました。そして2回目はブックレット(解説書)を開き、曲ごとに書き込まれた丁寧なコメントに目を通しながら聴いたため、その熱い思いが心に響き、感動がさらにひろがりました。この全集は、本場のアルゼンチンばかりでなく、欧米や日本の珍しい音源も加わっているので、興味は尽きませんが、私は以前にダンスやっていた関係で、ザビエル・クガート楽団／ダイナ・ショア(歌)を聴き、無性に懐かしさを覚えましたし、黒木曜子の憂いを含んだ歌声にも魅せられ、感銘を深くしました。

100年前の音源を含め、歴史に残る名盤を選んでは音的にも優れ、ジャケットを含め全体的に素晴らしい構成になっているのもうれしいことです。時を忘れて聴き入ったこのCDは、間違いなくこれからの私の“お宝”として、いつまでも傍におきたいと思います。(8/28)

松本 外司 (金沢市)

待望の「全集」を繰り返し聴いています。ほぼ毎日といっていいくらいです。解説書がまた解りやすく、それぞれに心に沁みます。解説を読みながら曲を聴くなんて、何年、いや、何十年ぶりになるのでしょうか、50曲もが集まると、あらゆる分野の、あらゆる個性の競演になり、興味は本当につきません。また50曲の曲順を見て感心するのは、続けて聴いてもまったく飽きないのには驚きました。実に変化に富んでいるのです。これは、やはり一義的には天下の大名曲の持つ不滅のパワーに由来していることに違いありませんが、と同時に、構成に関する卓抜した手腕があつてのことと、あえて申し上げておきたいと思います。

個人的には、CD1.の、不滅の名演で心を虜にするカジェタノ・プグリッシ楽団を筆頭に、ニコラス・ダレッサンドロ六重奏団が優れた音質で蘇ったことと、CD2.の、かつてダンスで踊ったハリー・ロイのルンバでの復活。そして戦後話題のザ・カステリアンズもなんとも懐かしく、心が膨らむ思いになりました。コレクションを提供された島崎さんと、陰ながら制作にご苦労いただいたオーディオパークにも心か

会員の広場

らの感謝を申し上げます。

(8 / 20)

小林 謙一 (横浜市)

かねてからお申し込みの「La Cumparsita全集」が漸く皆様にお渡しできる運びになりました。全50曲の内容は流石と言えるもので、大変聞き応えのあるものばかりだ。また、この全集製作にあたっての(有) オーディオパークの様々なご苦勞には心からの敬意を表するものである。島崎氏の解説は限られたスペースの中に、如何にして伝えたい内容を盛り込むかという、大変な苦勞の跡が偲ばれる。私からの一つの提案として、以下のような聞き方をお勧めしたい。

それは、面倒でも是非演奏家別の解説を一読後聞いて頂きたいということ。そしてこの聞き方を繰り返していただきたいということである。解説を読みながら聴くと、どうしても散漫になり勝ちで、折角の演奏(歌)も解説のkokの深さも、両方が中途半端になってしまう惧れがあるからです。(決して聖徳太子の真似をしてはいけません!)

「横浜プーロタンゴ同好会レコードコンサート会報No.293」 = (会の了解を得て転載)

佐藤 善英 (仙台市 元会員)

この「全集」を私がなぜ購入したか、その動機は、「ラティーナ」を見たからですが、どんな音源(楽団とレコード)が選ばれ、どんな編集でまとめられたかに興味があったからです。2枚のCDを通して聴いて、音質のよさ(澄んだきれいな音)は、想像以上でした。

(8 / 6)

鈴木 展子 (さいたま市 非会員)

タンゴを耳にすると、戦後の貧しい時代をかすかながら経験した私にとって、手回し蓄音機と共になぜかとても懐かしく、親しみを感じます。子育てや仕事からも解放され、しばらく前から世界旅行を楽しみ、タンゴ・ダンスなども手がける一方、この頃はつとめてタンゴのCDを聴くようにしています。そんな折の先日、地元のタンゴの集いで完成したばかりの「ラ・クンパルシータ全集」の存在を知り、さっそく友達と一緒にこれを求めました。かすかなスクラッチ・ノイズを含め、この名曲の数々の演奏に目下ひたすらに痺れています。

フランスで聴いたシャンソン、ポルトガルで耳にしたファド、イタリアで流れたカンツォーネ、スペインの洞窟に響いたフラメンコ、これらに共通する心の叫びともいえる哀愁が、欲目ではなくタンゴには凝縮しているように思えてならないからです。親切丁寧に書かれたこの解説書を片手に、ここしばらくは当「全集」で充実の日々を送りたいと思います。

(8 / 29)

松野 初美 (鈴鹿市)

「ラ・クンパルシータ全集」は、それぞれのオルケスタがオリジナルな編曲で競っていて、50曲もの全集ですが全く飽きることがなく聴けました。

どの演奏も素晴らしく甲乙つけられませんが、個人的には「アルフレッド・デ・ア

ンジェリス楽団」「ニコラス・ダレッサンドロ六重奏団」「エドゥアルド・ピアンコ楽団」が印象に残ります。改めて「ラ・クンパルシータ」の魅力にハマってしまいました。

島崎様の蒐集によるCD作成に敬意を表して。

岩垂 司 (札幌市)

前略、待望の「全集」、繰り返し聴いています。ライナーノートも熟読しています。新旧さまざまな演奏を同じレベルの音で聴けるのは嬉しいことです。それぞれの演奏者が、工夫を凝らして研を競っているのは、実に聴き応えがあります。ニコラス・ダレッサンドロは懐かしい演奏ですね。初めて聴いたときは吃驚仰天して、仲間と興奮して語り合った思い出があります。このような素敵な「全集」を作っていただいてありがとうございました。いまさらですが、「ラ・クンパルシータ」はしみじみよい曲だと思います。

ところで、「ラ・クンパルシータ」が永遠の名曲であることに変わりはないとしても、現時点でのタンゴの代表選手は「アディオス・ノニーノ」といえるでしょう。新旧交代は世の常ですから、「アディオス・ノニーノ」もいずれは他の曲にとって代わられるでしょう。そうしたら、50年後には「アディオス・ノニーノ全集」が作られるのかなあ、なんて馬鹿なことを考えています。

妄言多謝

吉澤義郎 (吹田市)

CDケースに同封のライナーノーツ（解説書）22頁（表表紙・裏表紙併せて24頁）をA4サイズに拡大し、1冊の書籍として体裁を整えました。

CDを聴くときは、毎回必ず拡大した解説書を開いて一字一字文字を追いつながり聴いています。こんなに内容の充実した解説書はほかに類を見ません。

数ある曲の中で一番心に残るのは、Disc. 2の2「アニバル・トロイロ楽団」の演奏です。タンゴを聴き始めて間もない頃SPでトロイロの「ラ・クンパルシータ」を聴いてバンドネオンの音色に身震いをし、タンゴの溝に嵌り込んだきっかけとなった演奏です。当時のことは今も鮮明に覚えています。

(9/8)



会員の広場

●バンドネオンの嫁入り先をお世話頂きありがとうございました。

当地「兼六公園」近くの「桂珈琲店」（当店は喫茶店でなく珈琲店だと、珈琲にこだわっており日本一怖い「珈琲店」といわれています）のマスターに常々「只飾っておくだけのバンドネオンだと、“ラ・クカラチャ”の穴をあけられるぞ」と言われておりましたので、美貌の名器に虫もつかず、安心しております。それにしても、仲人役「Tangolandia」に載せて頂いてすぐに問い合わせがあり「縁談」が纏まりました。「Tangolandia」の力は凄いです。お世話様でした。

余談ですがこの「桂珈琲店」のマスターは、以前機関誌の「喫茶店」探訪記（注：2014年春号）で、吉澤、山田両氏が訪問された「チケー」の常連だった方です。

（松本外司）

●バンドネオン譲ります。

バンドネオンを習いたい方、展示品として使用される方にお譲りします。1920年頃に製作されたもの。1989年にDonato Racciattiが初来日時に携行したもの。その後も日本での演奏に使用していた。修理・調律は2015年6月1日高谷照信氏による。ご希望の方には現物をお見せします。

現所有者：亀山 寛 TEL：048-855-5159 メール：cuatro-7628@garnet.dtime.jp

（亀山 寛）

●戦後のSP日本盤（新品で購入したもの）譲ります。

ダリエンソ、カナロ、ディ・サルリ、早川真平とオルケスタ・ティピカ（歌：藤沢嵐子）その他 約300枚、一括販売を希望。その場合蓄音器（ポータブル）付で格安でお譲りします。先輩のご遺族から委託されたものです。

（島崎長次郎）

●機関紙統合の提案。

現行の機関誌2誌の統合・一本化を提案します。役員会でご検討の上、早期に結論を出して頂きたくお願いします。提案理由：本来、Tanguendo en Japón は正規の教科書、Tangolandia は副読本的存在であったと思いますが、現在ではその役割区分が難しくなっているように思われます。Tanguendo が Tangolandia を吸収する形で一本化して発刊することが、これからのNTAの発展・会員の拡大に寄与するのではないかと思います。

（吉澤義郎）

新・訳詩コーナー

大澤 寛

「Afiches」(ポスター)

Letra : Homero Expósito Música : Atilio Stampone

ポスターの中で 残酷に
宣伝文句が威張り散らす ポスターの中で 残酷に
紙で出来たポスターが千切れている中に
夢が売られている
心が投げ売りされている
そしてお前が現れる
青春の最後の欠片かけらを売りに
俺にもう一度十字架を掛けに！
ポスターの中で 残酷に お前は笑っている！
何処かの片隅でピストル自殺でもしたくなる

夜は仕切りの扉に
隈のある肌を描く
絵筆を使って
空気を湿らせ
それで春を造り出す
それがどうした？
お前の物は残っていても お前はいない
なにやらお前は もう皆のためのものだ
ショーウィンドウの中の裸体画みたいに
お前の傍で俺は働いた お前のために
嘘じゃない そして俺はお前を失った

俺はお前に家庭しよたいを作った
いつも貧しかったが 俺はお前に家庭しよたいを作った！
懸命に働いて 笑うこともなくなった
お前のために働いて
お前のために血を流し
その果ての現実には 喉を砂ごすで擦って
詰まらせて叫ぶことも出来なくする
俺はお前に家庭しよたいを作った それは愛の過ちだった！
何処かの片隅でピストル自殺でもしたくなる

(ネットの todotango で Roberto Goyeneche が1972年に録音したものが聴けます。他にも Adriana Varela が MELOPEA から出したCDがあります)

日本タンゴ・アカデミーの行事予定

- ◎東京リンコン 日 時：11月8日（火） 次回 明年1月24日（火）
会 場：原宿「クリスティー」
- ◎中部リンコン 日 時：12月11日（日）
会 場：名古屋「NHK文化センター」
- ◎関西リンコン 日 時：11月13日（日）
会 場：「サロン・ド・あいり」
- ◎東北リンコン 日 時：11月24日（木）盛岡にて開催
会 場：ライブ・レストラン「アンサンブル」
- ◎セミナー 日 時：11月13日（日）
会 場：信濃町「東医健保会館」

会員動 静

(2016年10月1日現在 181名)

入会者

吉川雅子（東京都） 柳下昌孝（さいたま市） 津森健吾（奈良県）
会田桃子（東京都） 大西秀男（神奈川県）

次号の原稿締め切り日

Tangueando en Japón (2017年1月発行)：2016年11月30日

編集後記

ようやく秋らしくなりました。皆様お変わりなくお過ごしのことと拝察いたします。
去る8月27日の役員会決議に基づいて機関誌2誌の合体・統合に向かっている具体的な検討を進めております。詰めねばならない要素が多々ありますが、背表紙付きの製本(Tangueando誌の様式)で、中身が濃くそして親しみやすい紙面作りを目指しております。皆様の一層のご協力をお願いいたします。(大澤)

日本タンゴ・アカデミー副機関誌

「Tangolandia」(非売品・禁無断転載) 第33号 2016年10月 発行

発 行：日本タンゴ・アカデミー
〒156-0044 東京都世田谷区赤堤2-32-14-104 (飯塚方)
電話&FAX 03-3324-1989 E-mail iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編 集 部：大澤 寛(編集長) 〒162-0051
東京都新宿区西早稲田2-1-23-609
TEL 03-3208-2247
E-mail hdomingo@bc4.so-net.ne.jp

副 編 集 長：池永博威・笠井正史・鈴木啓子
編 集 委 員：弓田綾子・宮本政樹・島崎長次郎
表紙デザイン：脇田富水彦

印 刷：株式会社 藤印刷 〒102-0072
東京都千代田区飯田橋2-13-1